



* 0034473000 *

0034473-000

363-K094ウ

社会主義神髓

幸徳秋水・著

山川書店

昭和23

AGC

363

K094

The Fabian Tract No. 2

社會主義神髓

幸 德 秋 水 著

山 川 書 店

363
K094



幸德秋水著

社會主義神髓

一九四八年

山川書店刊



一八四八平

山田書院

社會主義神髓

國立圖書館
昭 23 2. 10 和
購入

幸徳秋水著

例言

茲にフエビアン・トラクト第二集として、幸徳秋水著「社會主義神髓」を江湖におくる。本書は秋水が、苦心半年の推敲を経て明治三十六年初めて上梓したところの歴史的文書である。その反響が如何に大であつたかは、本書が同年忽ち數版を重ねたことを以てしても明瞭である。實に本書は、日本語の、日本人の手による、日本人のための、最初にして最高の社會主義文獻であつて、秋水の學殖の深さに基づく驚くべき外國文獻の消化力は、その筆致の名調子と相俟つて、簡にして要、社會主義の神髓を一舉に論斷し去つて、あだかもかの「共產黨宣言」にも比すべき空前絶後の生形を放つている。そして秋水が本書の自序で述べている意圖の適切さと本書の意義とは、いみじくも、今日にもまして大なるはなく、本協會が新裝再び本書を世に問う所以も亦ここにこそある。尙この名著を通して大先輩の息吹により親炙するよすがとして、當協會研究部に於ては、文中難解の字句に振假名と簡単な註を施し、卷末に略譜を附し併せて讀者の便に供した。

昭和二十二年十二月

協會研究部

目次

例言.....三

自序.....五

第一章 緒論.....九

第二章 貧困の原由.....一八

第三章 産業制度の進化.....二三

第四章 社會主義の主張.....三〇

第五章 社會主義の效果.....三六

第六章 社會黨の運動.....四二

第七章 結論.....五一

著者略歴.....五五

自序

「社會主義とは何ぞ」是れ我國人の競うて知らんと欲する所なるに似たり、而して又實に知らざる可らざる所に屬す。予は我國に於ける社會主義者の一人として、之れを知らしむるの責任あるを感ずるが故に、此書を作れり。

近時社會主義に關する著譯の公行する者、大抵非社會主義者の手に成り往々瑣斷に流れ正論を失す、其然らざるも或は僅に其一部を論じ、或は單に一方面を描くに過ぎず。而して活論の者は却つて煩冗に過ぎ、短簡なる者、亦要領を得難きの憾み有り。

是を以て予は本書に於て、勉めて枝葉を去り、細節に拘せず、一見明白に其大綱を了會し要義に透徹せしめんことを期せり。世間未だ社會主義の何たるを知らざるの士之に依て、所謂「鳥眼」を做すことを得ば、幸ひ甚し。

蓋し著述の難きは徒に紙数を多からしむるに在らずして、實に次序の體を得せしむるに在り、材料を豊にするに在らずして繁簡の中を得せしむるに有り。本書固より翻々の小冊

なりと雖も、而も補を代ふること十數回、時を費す半年の久しきに及びて遂に意に滿つる能はず、懶惰何ぞ堪へん。但だ予の不才之を奈何ともするなくして、而して江湖の社會主義を知らんとする者、益々急なるを見て、忍んで割割に付するを爲せり。故に本書説く所に關し、反對の意見若くは疑問を以て質する、の人あらば、予は喜んで更に之が答辯説明の責に任す可し。

本書執筆の際、差照に責せしは、

Max, K. & Engels, F. Manifesto of the Communist Party.

Max, K. Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production.

Engels, F. Socialism, Utopian and Scientific.

Kropk, T. An Inquiry into Socialism.

Ely, R. Socialism and Social Reform.

Buse, W. A Handbook of Socialism.

Morris, W. & Bax, E. B. Socialism: its Growth and Outcome

Buse, W. The Encyclopedia of Social Reform.

等の數種也。初學少年の爲めに特に之を言ふ

明治三十六年六月

著者

註1 Birds-eye view 飛鳥の目。

註2 割は彫刻用の曲刀、割は同じく曲りのみ。轉じて彫刻の義。すなはち版に割んで出版すること。

"Let the ruling classes tremble at a Communistic revolution. The proletarians have nothing to lose but their chains. They have a world to win. Working men of all countries unite!"

註3 「支配階級をして、共産主義革命の前に震慄せしめよ。プロレタリアは、その鎖鎖のほかに、失うべき何物をもたない。プロレタリアは、獲得すべき一切をもっている。萬國の労働者團結せよ！」

(マルクス・エンゲルス、「共産黨宣言」の結びの二節)

第一章 緒論

論

○クロムウエルと言ふこと勿れ、ワシントンと言ふこと勿れ、ロベスピエールと言ふこと勿れ、若し予に實に古今最大の革命家を以てする者あらば、予は實にゼームス・ワット其人を推さずんばあらず。彼れ夫れ一たび其精緻の頭腦を致して、造化の神機を捉來し、之を人間の眼前に展開するや、世界萬物實的生活の状態は、俄然として爲めに一變を致せるに非ずや。嗚呼彼所謂殖産的革命の效果や眞に偉なる哉。

註4 O. Gravelin 一五九九—一六五八、英國の軍人、政治家。一六五三年護國公 (Lord Protector) となり獨裁政治を行い、亦清教徒的精神を以て峻厳な風教の改革を行う。

註5 M. M. I. Robespierre 一七五八—一七九四、佛國の革命家、一七九二年國民議會に選出され、公安委員團長として恐怖政治を行い、後捕われて死刑にさる。

註6 James Watt 一七三六—一八一八、英國の機械技術者、一七六三年蒸氣機関の改良製作に成功、新開業革命の契機となる。

○蓋し今の紡績や、織布や、鑄造や、印刷や、其他百般工技の器、鐵道や、汽船や、其他百般交通の

具、之を望めば恰も魁魁の如く、之に就けば恰も山嶽の如く然り。而して此等の機器の常に自在に驅使せられ、無礙に運轉せらるるもの、唯だ蓬々然たる蒸氣一吹の力に由れることを思ふ、其術何ぞ爾く巧にして其能何ぞ爾く大なるや、若し十八世紀中華の人類を地下に起して以て今日を觀せしめば、應に呀然として駭然驚倒すべきや必せり。況んや之に次ぐに電氣發明の奇と其應用の妙、刻々に新なるを以てするに至つて、人智の窮極する所、眞に測る可らざる者有り、予は萬物の靈長の語、於是て始めて始めて駭有るを覺ゆ。

註7 ずだま、水の神。又は木石の怪物。形は三歳の小兒の如く、體は赤黒色で耳長く、能く人語をまねて人をだますという。

註8 大きく口を張つて驚くさま。

○然れども此等機器の發明及び其改善に由て打成せる、所謂殖産的革命の貴命すべき所以の功果は、獨り其技の巧且つ妙なるに在らずして、實に其殖産の儲多に、其交換の利便なるに在らざる可らず。

○蓋し近時生産力發達の程度及比率は、其産業の種類異なるに従つて差あるが故に、詳密精確の統計を得難しと雖も、而も機械が人力に代れるが爲めに、斷して著大の増加を來せるや論なし。故

授イリーは曰く、或種の産業は爲めに十倍せり、或種の産業は爲めに二十倍せり、更妙の生産の如きは、優に百倍し、書籍版行の如きは優に千倍せりと。ロバート・オーエンは早く前世紀の初に於て公言して曰く、五十年前六十萬人の勞働を要せるの財富は、今や僅に二千五百人の力を以て生産し得べしと。而して爾後今日に至る迄百年間、更に階層の進歩ありしや、疑ふ可らず。某學士は亦曰く、近時の器械は一家五口の戸口に供するに、各々昔時六十人の奴隸の生産せしと同額の資財を以てするを得べしと。由是觀之、最近百餘年間に於て、世界の生産力が少くも平均十數倍の増加を爲せるは、何人も之を斷言するに躊躇せじ。

註9 同註8。一八五四—? 米國の經濟學者、社會問題評論家。一八八一年ジョンス・ホプキンス大學教授、一八九二年ワイズコンレン大學教授、社會主義、勞働問題等の權威。

註10 Robert Owen 一七七一—一八五八、英國の空想的社會主義者。初め一紡績工場の支配人として勞働者の生活改善に努め、次いで社會政策運動に乗出し、後、社會主義的立場を取り、「ニウ・ハーモニー」共產社會の提案、實驗等を行う。

○而して是等儲多の財富が、世界各地に運輸され交換さる、や、亦其自在と敏活とを極む。蛛網の如き鐵道航路は、以て坤輿を縮小すること幾千里、神經系統の如き電線は、以て萬邦を束ねて一體

と爲す。遂に屠れる羊肉は直に英人の食糧に上る可く、米國にて作れる棉花は遠く亞細亞人の糧を養ふ。觀念の相俟り、有無の相通する、有史以來實に今日より盛なるは莫し。

註11 坤は土と相同の意。異は事の物を載せるところ、故に地に例える。共に地のことをいう。

○嗚呼是れ實に所謂近世文明の特質也、美華也、光輝也。吾人生れて這個文明の民たるを得て、是等空前の偉觀壯觀を仰ぐ者、驚かに自ら慶し、且つ誇るに足る有るに似たり。

註12 進歩と同じく「この」とか「これ」とかの意。

○然れども、吾人は近世文明の民たるに於て、眞に自ら慶す可き乎、眞に自ら誇る可き乎。否、是れ疑問也、然り大疑問也。

○試みに一考せよ、近時機器の助けあるが爲めに、吾人生産の力が十倍、百倍、時としては千倍せることは、即ち之れ有り。然らば則ち世界多数の勞働者は、殖産的革命的以前に比して、大に其勞働の時と量とを減じ得可きの理也。而も事實は之に反す、彼等は依然として永く十二時間乃至十四五時間苛酷の勞働に服せざる可らざるは何ぞや。奇なる哉。

○又一考せよ、近時千百倍せる過多の財富は、運輸交通の機關の助けあるが爲めに、世界の一隅より一隅に至る迄、自在敏活に分配貿易せらるゝことは、亦眞に之れ有り。然らば則ち世界多数の人

類は、衣食大に餘り有りて、洋々太平を謳歌し得可きの理也。而も事實は之に反す、彼の口腹饒だにも飽かずして、父母は飢寒し、兄弟妻子離散する者、日に益々多きを加ふるは何ぞや、奇なる哉。

註13 精はかす、精はぬか、甚だしい粗食の意。「精進にも飽かず」とは貧乏の甚だしいのをいう。

○人力の必要は省減せり、而も勞働の必要は減少せざる也。財富の生産は増加せり、而も人類の衣食は増加せざる也。既に勞働の苛酷に堪へず、更に衣食の匱乏に苦しむ。故を以て學校の設くる多くして、人は教育を受くるの自由を有せざる也、交通の機關便にして、人は旅行の自由を有せざる也、醫治の術進歩して、人は療養の自由を有せざる也、多数政治の制ありて、人は參政の自由を有せざる也、文藝美術發達して人は娛樂の自由を有せざる也。而して所謂近世文明の特質や、美華や、光輝や、如此にして多数人類の幸福、平和、進歩に於て、果して幾何の價值有りとする乎。

註14 既も乏も共にとほしいという意。

○言ふこと勿れ人は麵包のみにして生きずと。衣食なくして何の自由あることを得る耶、何の進歩あることを得る耶、何の道徳あることを得る耶、何の學藝あることを得る耶。管仲云へる有り、倉粟實而知禮節と、所詮人生の第一義は即ち衣食問題也。而も近世文明の民たる多数人類は、實に衣食の匱乏の爲めに進まざるに非ずや。

註16 春秋時代の齊の賢相で、桓公をたすけて天下に覇をとなえしめた。

註16 倉廩は米ぐらのこと。云う意味は、人は財産ゆたかにして始めて禮儀作法を知るといふ義。管子の「牧民」に出ている。

註17 心が落着かないでうろろするさま。いそがしい有様をいう。

○言ふこと勿れ勞働は衣食を生ずと。見よ彼の勞働せる人の子を、彼や生れて八九歳の幼時より其老衰病死に至る迄、營々として牛馬の如く驅られ、兀として蟻蜂の如く勞す、節儉にして勤勉なる、凡そ彼等に過ぐるは莫し。而して租税滯納の爲めに公賣の處分に違ふ者、年々數萬を以て算せらるる也。而して彼の衣食常に餘りある者は、常に勞働するの人に非ずして、却て徒手逸樂遊惰の人に非ずや。

註18 しげく往來するさま、又は利を求めるといふさま。

註19 一所懸命を用いるさま。

註20 すで、から手。

○然れども其勞働の痛苦や、猶ほ可也、若し夫れ勞働す可き地位職業すら之を求めて竟に得ること能はざるに至つては、人生の慘事實に之より甚しきは莫し。彼や壯健の體軀を有す、彼や明敏の頭腦を有す、彼や有爲の技能を有す、而して其力能く衣食の生産に任じて餘り有る者にして、唯だ其

職業を得ざるが爲めに、終生窮途に泣き溝壑に没轉する者、世間果して幾萬人ぞ。

註21 みぞ。たにま。

註22 ものこゝろがささま。

○好し高利に衣食せよ、殊券に衣食せよ、地代に衣食せよ、租税に衣食せよ、今の所謂文明社會に處して然る能はざる者は、則ち長時間の勞働也、苦痛也、窮乏也、無職業也、餓死也。餓死に甘んぜずんば、則ち男子は強盜たり、女子は醜業婦たらんのみ、墮落あるのみ、罪惡あるのみ。

○然り今の文明や、一面に於て燦爛たる美華と光輝とを發すると同時に、一面に於て暗黒なる窮乏と罪惡とを有す。燦爛の天に翔翔する者は千萬人中僅に一人のみ、暗黒の域に没轉する者は世界人類の大多數也。是れ豈に吾人類の自ら誇るに足る者ならん哉。

註23 鳥のかけまわる義。亦得意にふるまうこと。

○嗚呼世界人類の苦痛や飢凍や、日は一日より急に、月は一月より激也、人類の多數は唯だ其生活の自由と衣食の平等とを求むるが爲めに、一切の平和、幸福、進歩を犠牲に供せずんば已まざらん。とす。人生なる者は竟に如此き者耶、如此くならざる可らざる耶、耶穌の所謂祖先の罪耶、浮屠の所謂婆娑の常耶。嗚々豈に是れ眞理ならんや、正義ならんや、人道ならんや。

註24 地獄の境界で、僧侶、ほとは、又は佛敎の事。

註25 事の意外なのに驚いて發する聲。

註26 Truth

註27 Justice

註28 Humanity

○嗚呼彼の偉大なる殖産的革命の功果は、竟に人道、正義、眞理に合す可らざる乎。所謂近世文明の世界は、遂に人道、正義、眞理を現す可らざる乎。是れ個の問題や二十世紀の陌頭はくとうに立てるスヒンクスの謎語也。之を解決する者は生さん、否らずんば死せん、世界人類の運命は懸けて此一謎語に在り。

註29 みちばた。

註30 Greek Mythology 神話では神身女固有靈の怪物で通行人に難を掛け之を解を得ないものは悉く殺したといふ。又古代エチオピアの獅子身負の像をいふ。轉じて亦不可解の人、謎の人物をいふ。

○誰か能く之を解決する者ぞ、宗教乎、否、教育乎、否、法律乎、軍備乎、否、否、否。

○夫れ宗教や以て未來の樂園を想像せしむ。未だ吾人の爲めに現在の苦痛を除き去らざる也。教育や以て多大の智識を興ふ。未だ吾人の爲めに一日の衣食を産出せざる也。法律や能く人を責罰す、人

を懲らしむるの具に非ざる也。軍備や能く人を屠殺す、人を活かしむるの具に非ざる也。嗚呼、誰か能く之を解決する者ぞ。

以貧財奪子孫。 不必操戈入室。

貧財を以て子孫を奪う。 必ずしも戈を操て室に入らず。

以軍備殺世。 有知接爾伏兵。

軍備を以て世を殺す。 劍を接して兵を伏するが如きもの有り。

第二章 貧困の原由

○醫藥を投ずる者は、先づ其病源如何と診するを要す。借問す方今生産の資財乏しきに非ず、市場の貨物少きに非ずして、而も吾人類の多数は、何が爲めに爾く衣食の匱乏を感じる乎。

○他なし之が分配の公を失せるが爲めのみ。其世界に普遍せられずして、一部に堆積せらる。が爲めのみ、其萬人に均分せられずして、少数階級に壟斷さる。が爲めのみ。

○英米兩國の若き、其産業の進歩と隆昌とは、古來類例なき所にして、世界萬邦の俱に感歎垂涎する所也、而も彼等が富の分配の情狀に至つては、却て酸鼻を値する者あり。

○トーマス・シアマンは算して曰く、米國の富の七割は、實に其人口の一分四厘の少数の占有する所たり、而して他の一割二分の富は、僅に九分二厘の人口の爲めに占有せられ、殘餘の人口即ち八割九分四厘の多数生長は、僅に一割八分の富を保つに過ぎずと。博士スパールが英國の富の分配を算するに曰く、英人二百萬の多数は僅に八億の財産を有するに過ぎざるに、一面に於て十二萬五千人の少数は、却つて七十九億の巨額を占有す、且つ總人口の四分の三以上は全く無資産也と。而し

て是等兩國の窮民公費の救助を仰ぐ者、實に數百萬人の多きに及べり。

○是れ豈に驚く可きの偏重に非ずや、然れども唯に英米のみならんや、獨逸も然り、佛國も然り、伊國も然り、澳國も然り、彼等各々其大小高低の度と率とを異にすと雖も、而も現時財富の一部に集中するは、世界萬邦俱に其趨勢を同じくせる所也。而して我日本に於ても亦然らざるを得ず。

○我國に於てや、凡そ何等の物と事とを問はずして、未だ精確の統計の信據す可きなきは遺憾の至也。然れども近時我國財富の分配が益々一部に偏重し、貧富益々懸隔するは争ふ可らざるの事實也。見よ、土地は益々兼併せらる、に非ずや、資本は益々合同せらる、に非ずや。彼の資本、資本を吸ひ、息銀、息銀を生むや、國家人民全體の資産の額は甚だ増加を見ざるに拘らず、大資本家、大地主なる少数階級の資産は日に其膨脹を致すこと、恰も雪塊の一廻轉する毎に、自ら其面積を増大し來たるに似たらずや。

○試みに思へ、若し近世物質的文明が、其精緻の器、巧妙の術に依り、年々産出する所の巨額の財富をして、多数人民公平に分配して、以て日用の消費に供するを得たりとせよ、何ぞ衣食の匱乏を嘆ずる今日の如きを要せんや。而も分配の公を失する如此く甚しく、其一部に堆積し、少数階級に壟斷せらる、如此く甚し。怪しむ無き也、世界の多数が常に飢饉の域に没轉することや。

○於是乎、別に一間は提起せられざるを得ず、何ぞや。

○蓋し社會の財富や、決して天より降下するに非ず、地より噴出するに非ず、一粒の米、一片の金と雖も總て是れ人間労働の結果に非ざるは無し。夫れ唯だ労働の結果也、其結果や當然労働者即ち之が産出者の所有に歸す可きの理に非ずや。而も多數の労働者よ、何故に汝は汝の産出せる財富を自由に所有し、若くば消費すること能はざる乎。古詩に曰く「滿身歸屬者、是匪獲富人」と、何故に獲富の人は却つて歸屬を蒙ふこと能はざる乎。

註一 歸屬すなわち、あやむらや、うすむらをかからざりておまるとして居る時は、實業に富を獲つてその歸屬を生産した人ではない。

○他なし、彼等は一切の生産機關を有せざれば也。換言すれば即ち資本を有せざれば也、土地を有せざれば也。資本なき者は労働すること能はざる也。土地なき者は労働すること能はざる也。労働せざれば即ち餓死せざる可らず。彼等は其餓死を免る、に急なる丈け、夫れ丈け、生産機關を求むるに急ならざるを得ず。其生産機關を求むるに急なる丈け、夫れ丈け一切の利益幸福を擧げて之が犠牲に供せざることを得ず。而して彼等は實に資本所有者、土地所有者の足下に拜跪して、資本と土地との使用の許可を乞はざる可からず。而して此使用の許可を得るの報酬として、其生産の大部

を資本家、地主の倉庫に獻納せざるを得ず。而して彼等が終産、若くは生産、營々たる勞役の功果は、憐れむ可し、唯だ其不幸なる生命を支ふるに過ぎざるのみ。然り現時の小農及び小作人は實に如此きの状態に在り、現時の職工は實に如此きの状態に在り、土地と資本とを有するなくして、賃銀に衣食し、給料に衣食する者、皆な實に如此きの状態に在り。

○試みに思へ、若し世界の土地と資本とをして、多數人類が自由に其生産の用に供するを得たりとせよ。彼等が多數の金利を徴せられ、法外の地料を掠められ、若くは低廉の賃銀を以て雇役さる、の要なくして、其労働の結果たる富財は直ちに彼等の所有として、自由に消費することを得たりとせよ。分配金を失して、貧富の懸隔する、何ぞ今日の如く甚しきに至らんや。而も彼等は唯だ労働の力を有するのみ。土地と資本との兩者に至つては、全く少數階級の専有に歸して、其生産の大部を納むるに非ざるよりは、決して使用するを許されざる也。怪しむなき也、世界の多數が常に飢凍の域に滾轉することや。

○於是乎、更に一間は提起せられざるを得ず、何ぞや。

○夫れ土地や資本や、一切の生産機關は、人類全體を生活せしむる所以の要件也、之を壟斷し占有するは、即ち人類全體の生活を左右し、死命を制する所以也、彼地主資本家なる者果して何の徳あ

り、何の権利あり、何の必要あつて、之を壟斷し、專有し、増大して、以て多數人類の平和と進歩と幸福とを蹂躪するや。

○他なし、僥倖のみ、滑智のみ、貪慾のみ。彼等地主資本家や、時に或は勞働に従ひ生産を扶くるなきに非ざる可し、勤勉なることなきに非ざる可し、節儉なることなきに非ざる可し。然れども彼等が勤勉なる勞働者、節儉なる生産者としての所得や知るべきのみ。而して彼等が地主資本家として、擁する所の財富や、決して勤勉と節約とに依て得可き所に非ざる也。彼等の或者は即ち父祖の讓與也、或者は即ち投機の勝利也。或者は即ち利息の堆積也。然り今の富厚を重ねる者、三者必ず其一に居らざるはなし。而して其富豊じて資本となり、株券を買ひ、土地を併すや、彼等は一舉手一投足の勞なくして、飽暖逸樂以て多數人類勞働の結果を掠奪す。而して其掠奪せる富は、更に轉じて資本となり、再び多額の富を掠奪するの武器となる。如く此にして轉々窮る所を知らずして、而して少數者の富益々富を加へ、多數者の貧益々貧に陥るに至れる也。故にブルードンは叫んで曰く、「財産は強奪の結果也、資本家は盜賊也」と。然り道義的眼光より之を見る、彼等は實に自ら其盜賊たるを知らずして盜賊たる也。又何の權あり、何の權利あり、何の必要ある者ならんや。而も吾人は是等道義的盜賊を放棄して、以て其專恣掠奪に任ぜるに非ずや。怪しむなき也。多數人類

が常に飢凍の域に墜轉せることや。

註2 P.H. Prodhon 一八〇九—一八六五、フランスの理想的社會主義者、一八四〇年「財産とは何ぞや」との題實論文に於て採用され著名となる。彼は「財産とは物益なり」と答えた。

○於是乎吾人は現時社會の病源に於て、略ぼ知る所あるを信す。何ぞや、曰く、多數人類の飢凍は、富の分配の不公に在り、富の分配の不公は、生産物をして生産者の手に歸せしめざるに在り、生産物をして生産者の手に歸せしめざるは、地主資本家なる少數階級の掠奪する所となれば也、地主資本家の掠奪する所となるは、土地や資本や一切の生産機關をして初めより地主資本家の手中に占有せしむれば也。

○果して然らば之が治療の術亦實に知るに難からざる也。予は即ち斷言せんとす、今の社會問題解決の方法は、唯だ一切の生産機關を、地主資本家の手より奪うて、之を社會人民の公有に移す有るのみと。

○然り「一切の生産機關を地主資本家の手より奪うて、之を社會人民の公有となす」者、換言すれば、地主資本家なる徒手游食の階級を廢滅するは、是れ實に「近世社會主義」一名「科學的社會主義」の骨髄とする所に非ずや。

○於是乎世間社會主義を熟知せざるの士、啞然失笑して曰はんとす、何等の囁語ぞ、何等の妄想ぞ、思へ社會の生産は二に地主資本家の左右する所に非ずや、其分配は一に地主資本家の指揮する所に非ずや、農工商經濟は總て彼等に依て維持せられ、多數人類は總て彼等の手に養はる。曷んぞ能く之を廢滅することを得んや、假に之を能くせしむるも、若し彼等微りせば社會は暗黒ならんのみ。而も漫に之が廢滅を言ふ、社會主義なるもの、抑も何等の妄想囁語ぞやと。

註 1 ぬごと、たむごと。

○嗚呼囁語を妄言乎、社會は永劫に地主資本家の存在を是認す可き乎、是認せざる可らざる乎。吾人は此等の言を爲すの人の向つて、先づ人類社會の組織し進化する所以に就て、一番の討查を請はざる可らず。

學之難平也。天折地絶。亦無自屈之類。

之を争つて平らかなり難く。天折地絶。亦た自ら屈するの期

類之不日也。皇天禍惡。爰有相安之日。

無し。之を争つて日まず。皇天禍惡。爰に相安んずるの日有り。

第三章 産業制度の進化

○近世社會主義の祖師カール・マルクスは、吾人の爲めに能く人類社會の組織せらる。所以の真相を透視せり。曰く「有史以來何の時、何の處とを問はずして、一切社會の組織せらる。所以の者は、必ずや經濟的生産及び交換の方法、之が根柢たらざるは無し。而して其時代の政治的及び靈能的歴史の如きは、唯だ此根柢の上に建てる者にして、亦實に此根柢よりして始めて解釋することを得ざるを得ず」云々。

註 1 Karl Heinrich Marx 一八一八—一八八三、尙次に引用されている一節のためには、「共產黨宣言」の一八八三年の英譯版の序文参照。

註 2 Epoch

註 3 Intellectual history 智識的歴史、或は文化史と譯してもよし。

○然り、人の生れて地に落つ、先づ食はざるを得ず、衣ざるを得ず、雨露風雪を防がざるを得ず。夫の美術や、宗教や、學術や、唯此基礎の要求の満足せらる。有りて、而して後始めて發展するこ

とを得べきのみ、故に其人民が一たび生産交換の方法を異にするに至るや、其社會の組織、歴史の發展、亦従つて其状態を異にせざるを得ず。

○見よ、太初の人類たる、縦鼻横目、吾人の人類たるに於て、果して幾何の差異ありしとするぞ。而も彼等の血族相集り部落相結びて、共產の社會を成すや、其衣食や唯其社會全體の爲めに生産し、社會全體の需用に充つるのみ。又個人あるを知らざりし也、階級あるを知らざりし也、況んや地主なるものをや、資本家なるものをや。レウイス・モルガンは算して曰く、人類社會有つて以來、殆ど十萬年、而して其九萬五千年は、實に共產制度の時代なりきと。吾人人類は實に此九萬五千年間地球上に點々散布せる血族的部落的小共產制度の時代に於て、實に靈雨たる野獸の域を脱却し、弓矢を製し、舟楫を製し、牧畜を解し、農業を習ふの進化變遷を経ることを得たりしなりき。

註4 Lewis Henry Morgan 一八一八—一八八二、アメリカの社會學者、人類學者にして原始社會論にアメリ

リカ・インディアン社會の研究家として著名、四〇年間イロクォイ族の中に生活して「古代社會」を著す。

註5 小島のうごめくさま。

○夫れ文明の進歩は、石の地上に落つるが如し、落つる益々低くして、速度益々加はる。古代人口

の漸く増殖し、團聚漸く繁榮し、衣食の需用亦漸く多大に、交換の方法従つて複雑なるに従つて、是等共產の制度は亦漸く傾覆の運に向へり。而して彼等が其會で生産し屠殺せる敵人を宥して、之を生産的に使役するや、即ち奴隷の一階級を生じて、更に人類社會の歴史に於て、全く一大段落を劃し來れる也。

○嗚呼奴隷の制度、今や吾人の口にするだも愧づる所なりと雖も、而も當時に在てや、特り全社會産業の基礎たるのみならず、彼の埃及、アッシリアの智識や、希臘の藝術や、羅馬の法理や、其千載の歴史を照耀するを得たる者、實に是等愛々たる億萬奴隷が淋漓の膏血なりしを知らずや。然り當時の文明を致せる者は、是等産業の制なりき。而して當時の文明を、覆せるも、亦實に是等産業の制なりき。花を種すの雨は是れ花を散ずるの雨たらざるを得ざりき。

○見よ、是等奴隷の膏血と其天然の富源も、亦一日涸竭に至らざることを得ず。而して羅馬末年の莫大なる淫逸腐敗の實、遂に之に依て辨するに足らざるに及んで、四方の攻伐は次げり、領土の擴張は次げり、貢租の請求は次げり、而して外正に叛く時は、内亂に瀆ゆるの日なりしに非ずや。

註6 したよるさま。

註7 喜びしくせめて食財をむさばり取るほど。

○於是乎羅馬に通ずるの大運は、熱帯の邊となれり、天下瓜分して産業全く萎縮す。次で起る者は即ち農奴の隷屬ならざるを得ざりき、之を保護する者は即ち封建の制度ならざるを得ざりき。然れども代辦は少時も休せず。經濟的生活の遷移すること一日なれば、社會の組織亦進化する一日ならざるを得ず。而して自由農工は生ず、城市の繁榮は次ぐ、農奴の解放は來る、交通の發達し、市場の擴大し、殖産の増加する、愈々急速を加ふ。而して地方的封建の遺殘は、遂に國民的及び世界的貿易の大潮流を抗闘するに堪へずして、自ら七花八裂し去れる也。

註8 いはらのくまじら。

註9 兵を分つごとく土地を分つこと。

註10 なんしはむこと。

註11 なる也。

註12 まがき、こゝでは封建階級の藩土をさす。

○後にフリスドリック・エンゲルも亦曰く「一昔社會的變化、政治的革命を以て、其究竟の原因が、人間の體面に出ると爲すこと勿れ、一定不變の正義の邊境に處ると爲すこと勿れ、夫れ唯だ生産交換の方法の變化如何と見よ。然り之を哲學に求むる勿れ、唯だ各時代の經濟に見よ、若し夫れ

現在の社會組織が非理たり、不正たり、昨日の正義が今日の非理となり、去年の正義が今年の非理となれるを見れば、即ち其生産交換の方法漸く變遷移し去つて、當初に適應せる社會組織が既に其用に堪へざるに至れることを知らん也」と。

註13 *Engels, Das Kapital* 一八二〇—一八九五、次に引用されている一節はエンゲルスの「空想より科學へ」社會主義の發展」の節の首尾である。尙本文では「エンゲルス」のことを「エンゲル」と云つてゐる。

○然り世界の歴史は産業方法の歴史のみ、社會の進化と革命は一に産業方法の變易のみ。誰か道ふ、今の産業制度は常住也と、誰か道ふ、今の地主資本家は永劫也と。

○然らば即ち現時社會の産業方法、マルクス以來所謂資本家制度として知られたる特種の産業方法は、果して何の處より來り、何の處に去らんとする乎。

○蓋し中世紀に在りてや、今の所謂資本家なく、今の所謂大地主なし。而して其社會を支持する所以の産業は、常に一般勞働者の手に在りき。地方に在りては即ち自由民若くは農奴の耕作なりき。城市に在りては即ち獨立工人の手工なりき。而して彼等が勞働の機關たる土地や、農具や、仕事場や、器具や、皆な各個人單獨の使用に遺する者なりしが故に、彼等は各個に之を所有して、自由に各自の生産を爲したりき。

○而して此等散漫にして小規模なる産業機關を集中し、擴大して、以て現代産業の有力なる槓杆と變ずるは、是れ産業歴史に於ける自然の大潮流なりき、所謂商工資本家の天職なりき。彼れ夫れ米國の發見や、喜望峰の通航や、東印度の貿易や、支那の市場や、世運の進歩は、産業の方法を確立して、地方的より國民的に、國民的より世界的に促進せざるは止まざりし也。而して第十五世紀以來如何に是等の産業方法が、漸次に諸國の歴史的段階を通過して、以て所謂「近世工業」に達するに至れるかは、マルクスが其大著「資本」に細説せし所也。

註14 じこのこと。

註15 Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production 通稱「資本論」と云われるもの、その傍題は

「資本主義的生産の批判的分析」である。第一巻は一八六七年マルクスの手で、第二巻は一八八五年、

第三巻は一八九四年夫とエンゲルスの手で出版された。

○然れども一般の生産機關が猶ほ個人的方法の域中に彷徨して、未だ多数労働者の協力を要すべき社會的方法を採用すること能はざるの間は、彼等資本家が直ちに是等生産機關を變じて、以て偉大なる産業的勢力を顯現するは到底不可能の事なりき。而も時節は到來せり、蒸氣機械の一たび發明せらるゝや、歴史は急轉直下の勢を以て、其「産業的¹⁷革命」を成功せり。

註16 さまじう、うらむつ。

註17 産業革命は、十八世紀の終りから十九世紀へかけて約百年間に亘る機械、動力等の生産手段の革命を中

心とする社會組織の變革で、一七〇〇年の發見、先ずイギリスに於ける紡績機物業方面に行われた。その結果、手工業を益減せしめ、機械による工場制を生起せしめ、生産力は異常に増加し、我本家と労働者の階級對立を發生せしめた。

○紡車は即ち紡績機械となれり、手織機は織物業となれり、個人の仕事は數百人乃至數千人を包容するの工場となり、個人的労働は變じて社會的労働となり、個人の生産物は變じて社會的生産物となる。見よ昔は個人各自に能く之を生産せる者、今や一織の絹、一尺の布と雖も、總て是れ多数の労働者が協力の結果に非ざるは無く、又一人の「是れ予の作る所、予一個の生産物也」と言ひ得る莫し。

○但だ吾人は知らざる可らず、産業的革命的功果や、彼が如く其れ顯著なりしと雖も、而も其初めに當つてや、彼等商工資本家は必しも其革命たる所以を承認する者に非ざりき。彼等の之を利導し助成する、單に其商品の増加發達を希ふに過ぎざりき、其商品の増加發達の爲めに、資本の集中、生産機關の膨大を希ふに過ぎざりき。唯だ此目的を達するに急なる、即ち個人的生産打壞の事に任

じ、更に個人的生産を保護する所以の封建制度崩壊の事に任じて、不知不識の間に其歴史的使命を了せるのみ。

○夫れ唯だ生産の増加を希ふのみ、之が交換の如何を問はざる也、夫れ唯だ資本の集中を希ふのみ、之が領有の如何を問はざる也。是を以て其生産は即ち協同的となれるも、其交換は依然として個人的なるを免れざりき、製造工場組織は既に新天地を現せるも、其領有は猶ほ舊世界の様式を脱する能はざりき。於是乎矛盾は生ぜざるを得ず。

○生産の猶ほ個人的なるの時に於ては、其生産物の所有に關する問題は、決して起來ること無かりき。各個の生産や、皆自家の技術を以てせり、自家の原料を以てせり、自家の器具を以てせり、而して彼れ及び彼の家族の勞働を以てせり。而して生産する所の結果が何人に屬す可き乎、言を俟たずして明かなるに非ずや。

○故に昔時生産機關を所有する者は、皆な其生産物を領有せり、而して是れ實に彼等自身が勞働の結果なるが爲めなりき。而して今の生産機關所有者も、亦其生産物を領有す。然れども見よ、其生産物や決して彼等自身の勞働の結果に非ずして、實に他人の生産する所に非ずや。然り今の勞働や協同的也、今の生産や社會的也、又一個の是れ予の生産物也と言ひ得るなし。而も是等の生産や、

其生産者に於て社會的に共有せらるること無くして、舊に依て唯だ個人の爲めに領有せらる、唯だ新舊地主資本家てふ個人の爲めに領有せらる。是れ豈に一大矛盾に非ずや。

○然り大矛盾也。而して予は信ず、現時社會の一切の害悪は實に這個の矛盾に胚胎し來れることを。

○其第一は即ち階級の争闘也。「近世工業」の一たび隆興するや、利息の関世間萬邦を席捲して、到る處個人的小産業の壓倒し去らる、者、紛々落葉の如くなりしは、元より怪しむに足らず。而して從來個人的生産者や、全く其利を失はざる可らず、其業を失はざる可らず。彼等は即ち其個人的小器械を棄てて、社會的生産に従はんが爲めに、大工場に向つて趨らざる可らず、然れども其生産物や即ち資本家てふ個人の領有に歸せるが故に、彼等の得る所は、僅に一日の生命を支ふるの賃銀のみ。加ふるに封建の制被壞せられて土地の兼併盛んなるに至るや、地方小農徒うて都會に出で、賃銀に衣食せんことを求むるは、是れ自然の勢にして、而して工業の發達熾んなる丈、夫れ丈、自由獨立の勞働者は漸く途を絶ちて、所謂賃銀勞働者なる者、日に多きを致せり。於是乎社會は、一面に於て生産機關を專有して、盡く其生産を領有するの資本家てふ一階級を生ずると同時に、他面に於て、彼の勞働力の外何物をも有することなき勞働者の一階級を生じて、兩者の間判然鴻溝を

劃するに至る。社會的生産と資本家的領有との間に生ぜる一大矛盾は、如かく此こにして先づ其一端を、地主資本家と賃銀労働者との衝突に現れる也。

註18 眞の高麗と楚の項羽とが天下を中分した時の鴻溝の地名、轉じて大いなるへだてを劃する義。

○嘗たに之のみに非ざる也、個人的領有の結果は即ち所謂自由競争ならざるを得ず、自由競争の結果は、即ち經濟界の無政府ならざるを得ず。昔時個人的生産の時に於てや、其生産は主として自家の消費に供し、餘あれば即ち地方の小市場に輸するのみ。故に其商品の需用の豫知す可らずして、一般競争の法則に支配せらるる、固より之れ無きに非ずと雖も、而も其範圍極めて狭せまにして、未だ其太甚たいけんなるに至らざりき。今や然らず、其作る所は決して生産者彼等自身の消費に充みつるが爲めに非ずして、盡く是れ個人の商品として交換の利を競ふに在り。夫れ唯だ個人の競争に一任す、生産力の増加し發達し、市場の擴大するに従つて、競争益々激烈に、世界の經濟社會は全く無政府の状態に陥り、優勝劣敗、弱肉強食、具つさに其慘を極めり。如此にして社會的生産と資本家的領有の間に生ぜる一大矛盾は、更に組織的なる工場生産と無政府なる一般市場との衝突となつて顯現せる者に非ずや。

註19 Anarchy

○然り矛盾の極は衝突也、衝突の極は即ち破壞に非ずや。今の資本家的産業の方法や、其發展に於て既に一大矛盾を以て其運行を始めたり、而して矛盾の發展する所、一は即ち階級の衝突となり、他は即ち市場の衝突となる。而して是等兩個の方面に於ける衝突や、互ひに巴は字じの如く相あひ、旋風せんぷうの如く相迫あひの間、其勢力漸次に激烈を致して、遂に現時の産業制度全體の大衝突大破壞に至らざるは已いまざらんとするを見る也。何を以てか之を言ふ。

○經濟的自由競争及び階級戦争の久しきに關るや、其結果は必ず多數劣敗者の其産を失ふ也、賃銀労働者の増加也、資本集中の強大也、生産器械の改良を加ふる也。彼の器械の改良が年々労働の需用を省減して已いまざると同時に、労働の供給が日々其増加を來すや、即ち多數労働者の過剰を生ぜざるを得ず。エンゲルの所謂「工業的豫備兵」なる者は是れ也。

註20 Industrial reserve army. 昔稱「産業豫備軍」と稱す。

○工業的豫備兵の現出や、近世工業の下に在て極めて哀しむべきの特徴なりとす。彼等は經濟市場の好況なるの時於ては、辛うじて其職に就くを得ると雖も、一朝貿易の萎靡おろするに遇へば、數萬乃至十數萬の多數労働者は、恰あたも塵芥ちんがいを捨つるが如く、工場外に放擲せられて、道途に凍餒とうがいせざるを得ず、是れ實に現時資本主義の常態也。而して我國の如き其慘狀未だ如此きに至らざると云ふと雖

も、而も社會の經濟が資本家的自由競争に一任する以上は、到底免る可らざるの趨勢にして、餘す所は唯だ時日の問題のみ。

註21 なましむ。

註22 ことえうえる。

○而して多數勞働者彼等自身の競争は之に伴うて激す。次で一般賃銀低落の勢ひは成る。一般賃銀の低落は、即ち勞働者をして其生命を支へんが爲めに、長時間過度の勞働に従はざるを得ざらしむ。而して資本家の掠奪は實に此際に於て逞しくせらる。

○マルクスは蓋し謂らく、「交換は決して價格を生ずる者に非ず、價格は決して市場に於て創造せらる、者に非ず。而も資本家が其資本を運轉するの間に於て、自ら其額を増加することを得るは何ぞや。他なし、彼等は實に價格を創造し得る所の驚く可き力を有する商品を購入するを得れば也。此商品とは何ぞや、人間の勞働力は是れ也。夫れ此力の所有者は其生活の必要の爲めに、之を低廉に賣却せざることを得ず、而して此力が一日に創造するの價格や、必ず其所有者が一日の生活を支持するの費用として受くる賃銀の價格よりも、遙に多し。例せば一日六先^{シリング}の富を創造し得る勞働力は、一日三先を以て購買せらる、其差額を名けて剩餘價格と云ふ。彼等資本家が其資本を

増加することを得るは、唯だ此剩餘價格を勞働者より掠奪して、其手中に堆積するが爲めのみ」と。

註23 以下マルクスの引用文中に「價格」とあるは、正しくは「價值」と譯するを通例とする。

註24 Surplus value 「剩餘價格」とあるは、註23と同じく、正しくは「剩餘價值」と譯すを普通とする。以下同じ。

○然り「剩餘價格」の掠奪は、資本を増加せしめて已まず、資本の増加は更に器械の改良を促して已まず、改良の器械は、再び轉じて剩餘價格掠奪の武器となる。而して爾く轉々するの間に於て、社會の生産力は層々膨脹して底止する所を知らず。而も内國市場の膏血は既に彼等資本家の絞取し盡す所となつて、社會多數の購買力は到底之に應ずるに足らず。於是乎彼等資本家は百方生産力疏通の途を求むるや急也、曰く、新市場を拓開せよ、曰く、領土を擴張せよ、外國の貨物を掃蕩せよ、大帝國を建設せよと。然れども世界の市場も亦限りなきことを得ず、現時生産的洪水が無限の氾濫は、竟に壅蔽し得る所に非ざるの勢を示せり。

註25 ふきぎおらう。

○而して來る者は即ち資本の過多也、資本家は之を搜するの事業なきに苦しむ、生産の過多也、商

品は之を輸するの市場なきに苦しむ、労働供給の過多也、工業的準備兵は之を雇使するの工場なきに苦しむ。今の文明諸國、苟しくも近世工業を採用するの地、皆な此デレンヤに陥り、若くは陥りつゝ、あちぎる者なきに非ずや。於是乎「生産過多」の叫聲は到處に反響す。

註26 Dilemma 狭き道、窮途。

○思へ資本家は飽意して、資本の集中、生産の増加を努めたり、而して今や彼等は却て生産の過多なるに苦しむ。器械の改良は人力の需用を省減せしめたり、而も多数の労働者は却て衣食の匱乏に苦しめり。社會多数の人類は、多額の衣服を作れるが爲めに、却て赤裸々ならざるを得ず。是れ何等の奇現象ぞや。現時産業制度の矛盾衝突は、於是て更に大躍進歩し來れる者に非ずや。

○嗚呼「生産過多」の叫聲、是れ實に破産の將に至らんとするを警むるの信號に非ずや。果然破産は其端を恐慌の噴出に發せり。

○恐慌の禍も本體なる説、貿易は萎靡を極むる也、物價は俄然として暴落する也、貨物は停滯して動かざる也、信用は全く地を踏ふ也、工場は傾々として閉鎖せらる也、多数の商工の破産は破産に次ぎ、多数労働者の失業は失業に次ぎ、穀肉庫中に充ちて、而して餓死却て途に横ふ。如此き者數旬、數月、甚しきは連年數年に達するに至る、フリーエーの所謂「充溢の危機」なる者

即ち是れ也。而して此等恐慌や、其起るや決して偶然に非ず、其去るや亦偶然に非ず。彼一千八百二十近年の大恐慌以來、殆ど毎十年、期を定めて以て其禍を被らざるなきを見は、如何に現時經濟組織の根底が、深く劇致する所ありしかを知るに足らん。

註27 うゑ死に人。

註28 きず、轉じて人民の疾苦。

註29 F. M. C. Fowler 一七七二—一八三五、フランスの理想社會主義者。未來の理想社會の設計を企て、フランククス (phalanx) なる社會主義社會の實驗を試みたが失敗した。

○而して恐慌の至る毎に、少數なる大資本家の能く此危機に堪ふるを得る者、常に多数の小資本家の破産零落に乗じて、併呑の慾を逞しくするは、自然の勢ひ也。加ふるに大資本家彼等自身も亦相互の競争の危険と、恐慌の襲來を憂慮して措かざるの極、漸次に領有交換に於ける個人的方法の範圍を讓歩して、社會的方法を採用し、以て矛盾衝突を緩和せんと試みたりき。株式會社の組織は之が爲めなりき、同業者大同盟の起るは之が爲めなりき。而して是等手段も亦彼等の運命を永くするに足らざるを見るや、彼等は即ち現時のツラストなる牙城を築きて、以て最後の惡戦を開始せり。如此にして自由競争の根底に立てるの資本家制度は、其進化發達の極、却つて自ら自由競争

を一掃し去りて、世界各国の産業は殆どツラストの獨占統一に歸せずんば已まざらんとす。

註30 Combination 企業連合などをいう。

註31 Trust 諸企業がその獨立性を失つて結合し組織上新たな一單位をなして市場を獨占するものをいう。トラストとは信託の義で、初め米國に於て信託會社の形態に於て行われた。

○然れどもツラストが猶ほ資本家階級の爲めに領有せらるゝの間は、現時の矛盾衝突をして、決して最後の解決を得せしめざるのみならず、却て一段を激進せしむるの具たらずんばあらず。何となれば今や彼等の事業は、唯だ生産の額を制限するに在れば也、價格を騰昂せしむるに在れば也、而して其獨占の暴威を利用して、法外の剩餘價格を掠奪するに在れば也、社會全體の窮困匱乏を増大するに在れば也。於是乎社會人類の多數は唯だツラストを所有する少數階級の爲めに、其貪慾の犠牲に供せらるゝに至れり。資本家對労働者の階級戦争は、其進化發達の極、遂に變じてツラスト對社會全體の衝突となり了れる也。

○而して社會全體は何時迄か這箇の状態に堪ふるを得る乎、何時迄か資本家てふ階級の存在を是認せんとする乎。彼の尅大なるツラストは、獨り無責任なる不規律なる個人的資本家の手に支配されざる可らざる乎、社會は之を公有して統一あり組織あり調和あり責任あるの産業と爲すことを得可

らざる乎。從來唯だ資本の集中と生産の増加とを以て天職使命となせるの資本家てふ一階級は、此に至つて既に其天職使命を了せるに非ずや、其存在の理由を失へるに非ずや。今や彼等は單に財富分配の防禦物として存するのみに非ずや、獨り労働者のみならず、實に社會全體と生産機關との間に於ける障壁として存するのみに非ずや。

○然り今や工場に於ける協同的、社會的生産組織の發達は遂に一般社會の無政府的自由競争と兩立せざるの點に迄達せる也、小數資本家階級の存立を認許せざるの點に迄達せる也。換言すれば矛盾衝突は其極度に達せる也。一面に於ては資本家的個人領有の制度が、最早是等の生産力を支配するの能力なきを示すと同時に、他面に於て是等生産力夫れ自身も亦其無限膨大の力の威壓を以て、現時制度の矛盾を排除し盡さんとせる也、私有資本の域を逸脱し去らんとせる也、其社會的性質を實際に承認されんことを要求命令しつゝある也。是れ豈に一大轉變の運に向へる者に非ずや、一大破裂の時に瀕せる者に非ずや。是れ實に世界産業歴史の進化發達する所以の大勢にして、資本家階級億萬の黄金も又之を如何ともする莫き也。

○新時代は於是て來る。

運賃不自之衷。 託之日月。 運賃不自之衷。 之を日月に托す。
天地不平之氣。 託之風雷。 天地不平之氣。 之を風雷に托す。

第四章 社會主義の主張

○現時の生産交換の方法、即ち所謂資本家制度は今や其進化發育の極點に達せり。夫れ勢ひ極まれば變ず、花瓣は一日散亂せざることを得ず、卵殼は一日破壊せざることを得ず、唯だ散亂す、故に新果あり、唯だ破壊す、故に雛兒あり。社會産業の組織に獨り此理法を免るるを得んや。

註1 雛兒は「ひよこ」のこと。花瓣に對して新果、卵殼に對して雛兒と掛る。

○而して之が進化の理法を説明し、其必然の歸趨を指示して、以て人類社會の向上を促す者、實に我科學的社會主義の主張ならずんばあらず。然らば則ち社會主義は吾人に向つて、果して何の新果と雛兒を持ち來さんとする乎。何の新時代を指示して、以て私有資本の舊組織に代へんとする乎。

○教授イリイは社會主義の主張を剖析して、四個の要件を包有すと爲す。言順る當を得たり。所謂四個の要件とは何ぞや。

註2 Blamatt、要素、成分などと譯す場合もある。

○其一は、物質的生産機關、即ち土地資本の公有是れ也。

○方今社會百害の源が、實に社會的生産機關を擧げて個人の所有と爲せるに在るは、前章既に之を言へり。夫れ唯だ個人の所有に委す、是故に之が所有者は徒手遊食して以て社會生産の大部を掠奪し、多數人類は爲めに益々匱乏墮落に至れる者、實に吾人の永く忍ぶ能はざる所也。而して之が統治や、決して區々小策の能する所に非ずして必ずや根柢の矛盾を排除して、以て産業組織全體の調和を得せしめざる可らず、生産機關の公有豈に已むを得んや。

○夫れ土地や、人類未だ生ぜざるの時よりして之れ有り、獨り地主の製作する所に非ざる也。資本や、社會協同の勞働の結果也、獨り資本家の生産する所に非ざる也。其の在るや唯だ社會人類全體の爲めに在り、個人若くば少數の階級の爲めに存するに非ざる也。故に地主資本家獨り之を專有するの權元より有るの理なしと雖も、而も之を使用して、社會其惠に浴するの間は猶ほ認す可し。若し。夫れ彼等が一己之を以て社會全體の富財を掠奪し、其幸福を犧牲とし、其進歩向上を阻礙するの具に供するに及びては、社會が直ちに之を彼等の手より掠奪して、マルクスの所謂「是等掠奪者より掠奪す」るの至當なるは、言を俛たざる所也。

註3 ゆるす。

○故に近世社會主義は、社會人民全體をして、土地資本を公有せしむるを主張す、社會人民全體を

して之より生ずる利益に與からしむるを主張す、而して更に從來經濟的意義に於ける地代及び利息の廢減を主張す。

○之れを以て甚だ奇異の感を爲すこと勿れ、見よ現時に於ても諸種の事業の既に公共の所有たる者多しとせざるに非ずや。郵便電信は、米國を除くの外は、文明諸國皆な國有たり、鐵道も亦日耳曼、奧地利、丁抹の諸國之を國有と爲し、森林、鑛山、耕地の一部、煙草、酒精の販賣の事業等、國有と爲す者多きに非ずや。但だ今の所謂國有なる者や、往々にして中央政府の所有を意味して、未だ完全なる社會的公有の域に達する能はざる者ありと雖も、而も個人若くば少數階級の私利の斷を脱せらるに至つては即ち一なるに非ずや。

註4. Open Road イスのこと。

○然り社會主義の主張や、決して中央集權を希ふ者に非ず、其機關と事業との性質如何に従つて、或は一國の有と爲す可く、或は郡縣町村の有と爲す可し。現時の公有産業にして、水道、電燈、瓦斯、街燈等が都市の所有に屬せるが如き、即ち是れ也。要は個人の手より移して、一般公共の利益に供するに在り。

○現時の經濟學者は皆な曰ふ。彼の初めより獨占的性質を帯ぶるの事業は、之を國有若くば市有と爲すべし、然らざる者は即ち個人の競争に委して以て其進歩を圖るに如かずと。然れども産業制度の進歩は、從來獨占的性質を帯びざる各種の事業をして、亦盡く獨占の事業と化せるに非ずや。彼の米國を見よ、製鐵も獨占となれるに非ずや、石油も獨占となれるに非ずや、石炭も紡績も、皆大會社、大ツラストの獨占として、他の競争を許さざるに至れるに非ずや。個人競争の極は即ち資本の集中合同也、資本の集中合同の極は即ち各種の事業をして、盡く獨占の事業たらしめずんば已まざる。經濟的自由競争より生ずる進歩は過去の夢也、今や問題は、此等獨占の事業をして依然少數階級に私せしむべきか、將た社會公共の所有に移して其統一を期すべきか、二者其一を選ぶに在り。是れ社會進歩の大勢にして必然の結果ならずんばあらず。而して社會主義の第一義は唯だ之を是れ指しせんと欲するのみ。

○要件の第二は、生産の公共的經營是れ也。

註5. Common management

○生産機關たる土地資本、既に社會の公有に歸すと雖も、其事業の經營に至りては猶ほ個人の手中に在る者多し、例せば鐵道の如き、街燈の如き、社會之を公有して而して其經營は即ち私設の會社に託し、酒精の如き、鹽の如き、煙草の如き、政府專占の事業となれる者にして、其生産若くば交

換の一部は、依然個人の事業として存し、或は公有の耕地にして、私人に委して耕稼せしむる等の類是れ也。而して是等私人若くは私設會社の經營の目的や、常に彼等自身が市場の利益を越ふに在り、彼等の利益一たび休せん乎、其産業は即ち廢棄せらる、是れ資本家制度の下に在て免る可らざるの狀態也。故に眞に社會の産業をして、個人の利益の爲めにせずして、社會全體の消費に供し、市場の交換の爲めにせずして、社會全體の需用を満足せしめんと欲せば、其經營や、決して私人の手に委す可らずして、必ずや公共の管理に待たざる可らず。社會は即ち獨り生産機關を公有するに止まらずして、公選せる代表者をして之を經營せしめざる可らず、而して是等の經營や、必ず社會全體に對して其責に任せしめざる可らず。

註6 耕はたがやす、耘は草を除く。

○或は曰はん。事業の經營や、唯私有として始めて能く其効果を擡ぐることを得んのみ、既に自家の私有に非ずとせば、誰か其職に忠なる者あらんやと。然れども見よ、今の三井家の主人は其事業の經營に於て、果して幾何の勤勞に服せる乎、岩崎氏の主人は其事業の管理に於て、果して幾何の技術を現せる乎。生産機關の膨大し、事業の發達し、生産の増加すること高度なるに及んでや、其運用は到底個人の技量の能く堪ふる所に非ずして、遂に多數協同の手腕を要するに至るべし、況ん

や凡庸庸情の資本家をや。現時諸國の大規模の産業に於て、其實際の經營管理は一として其所有者たる資本家に依て成さる、者なくして、却て所有者たらざる社員若くは雇人の技能に依て、能く其効果を奏しつゝあるに非ずや。社會主義は即ち是等世襲の所有者に代ふるに、社會公選の代表者を以てし、廢舊の資本家に代ふるに、責任あるの公吏を以てし、私人の使役せる雇人若くは社員に代ふるに、公共の任命せる職員を以てせんと欲するのみ、而して其産業の進歩は獨り所有者の利益たる者に非ずして、社會全體皆直ちに其恵に浴するを得べしとせば、予は未だ各人が今日に比して其職に忠ならざる所以を發見することを得ざる也。

○社會が如此にして一切の生産機關を公有し、一切の産業を管理するに至らば、社會人民全體は即ち其株主にして亦實に其労働者也。社會は其適する所の職業を彼等に與へ、彼等は其労働を以て社會に奉ず。而して其生産や既に市場交換の爲めに在らずして、社會全體の消費に在り、生産益々多くして、社會の需要は益々満足せらる、を得、又物價の低落を憂へざる也、又生産の過多を憂へざる也、而して労働者の失業の問題亦全く解決せらる、を得ん也。若し眞に生産の消費に過ぐるあらん乎、唯だ労働時間の短縮にして足れり、豈に又一人の其所を得ざる有らんや。

○否々實に失業の人なきのみならず、一面に於ては、萬人皆労働に服せざる可らざることを意味

す。公共的生産の下に在ては、利息なく地代なし、徒手遊居して以て他の勞働の結果を掠奪するの手段なければ也。フィフテ曰へる有り、「勞働せざる者は、即ち衣食の權利なし」と。是れ眞理也、正義也、社會主義は眞理正義の實現せられんことを要求す。

註7、なまけて遊び居ること。

註8、T. G. Fichte, 一七六二—一八一四、ドイツの哲學者。

○要件の第三は、社會的収入の分配是れ也。

○公共的生産の収入や、必ず社會公共の領有に歸すべくして、個人の擅に占斷するを許さざるは論なし。而して社會の公選せる代表者若くば職員は、先づ其の収入の一部を以て、生産機關の保持、擴張、改良及び備荒の資に充つるの外、他は總て社會全體に分配して其消費に供すべし。而して此等分配や之を生産する者特りに與かるのみならず、老幼其他勞働の能力無き者と雖も、固より之を要求するの權利有る可し。何となれば其富や既に社會の領有たり、其人や實に社會を組織する所の一員たれば也。此點に於て社會主義の主張は完全なる相互保險也、社會主義制度の下に在ては、吾人萬人は其生れてより死に至るまで、獨り疾病、災禍、老衰に對するのみならず、教育、娛樂其他一切の需用を満足すべき保險を有する也。但だ勞働の能力あつて而も其義務に服するを嫌ふ

が如きは嚴に制裁を加ふべきのみ、否な社會の組織改善し生活の苦痛減少するに従つて、是等不徳の徒亦自ら其途を絶つに至るべきは、予の信じて疑はざる所也。

○於是て吾人は重大なる問題に逢着す。何ぞや、曰く、其分配の公正てふことは是れ也。然り公正の分配、是れ實に社會主義の唱道せらるる所以の最大の動機也、社會主義要件中の要件也、産業組織が進化發達する所以の主要の目的也。然らば即ち如何の方法標準が果して其公正を得べしとする乎。

○分配の標準に關して、社會主義者の企圖古今一ならずと雖も、凡そ四種に別つ可し。一は其分配する所の物件、量と質と兩つながら必ず均一ならんことを要する者、パボーフ此説を持せり。次は技能成績の短長に比例して、報酬に等差あらしめんとする者、サフ・シモン¹⁰の主張せし所也。次は唯だ各人の必要に準じて給與する者、ルキ・フラン之を以て理想と爲せり。而して近時の社會主義者中、各人の分配額は其實に於てせずして其價格に於て平等ならしめんと唱道する者多し。

註9、F. N. Bahant, 一七六〇—一七九七、フランスの革命家、素朴なる共產主義の實行運動に移り、その暴動

決行前捕われて處刑された。

註10、Saint-almon, 一七六〇—一八二五、フランスの空想社會主義者。その思想は多分に宗教的感情的

せられたが、後世の社會主義思想に多大の影響を興えた。

註11 J. J. L. Blaise, 一八一—一八八二、フランスの社會主義者。一八四八年の二月革命の後には政府の一員となり國會議員を兼職、挫折して國外に亡命。歸國して國民議會に選ばれ急進主義者として文壇に重きをなす。

○夫れ各個の人、心身兩ながら皆な異ならざるはあらず、従つて生活の必要を異にし嗜好を異にす、強て其平等ならんことを求むるは、却つて公正を缺くの甚しき者、分配の量と質との均一なる可らざるや論なし。

○技能の長短に應じて報酬に等差ある、稍や公正に近きに似たり。而も如此くなれば勞働の能力なき者は即ち餓ゑざる可らず、是れ豈に社會的進徳の本旨ならんや。且つや技能の長短は必しも消費の多少に伴はず、例せば甲の成績は能く乙に二倍すと雖も、而も甲の食料の量は必しも乙に二倍せざるに非ずや。實に是のみならず、社會主義制度の下に在てや、其生産は多く社會的生産也、協同的生産也、甚だ個人特種の技能に待つある者に非ず。而して偶も個人特種の技能に待つ有るも、是等技能や、亦實に社會全體の學化、教育、熏陶、啓蒙の賜に非ざるはなし。既に社會に負ふ所多き者、亦多く力を社會の爲めに献すは當然の責務のみ、何ぞ特に物質的財富の多きを食む可きの理あらんや。

らんや。

○社會の生産分配の目的が、眞に社會萬民生活の需用を満足せしめ、其進歩を促すに在りとせば、吾人は即ち其必要に應じて分配するを以て、最終の理想と爲ざる可らず。爰に一個の家庭ありとせよ、而して父母なる者若し其子女を過するに、此子は才能あり、美衣美食を興ふ可し、彼子は庸劣なり、惡衣惡食にして可なりといふ者あらば、吾人の良心は果して之を忍ぶ可き乎。夫れ一家の兒女、長幼強弱皆な各々異りと雖も、而も其衣食分配の標準が、決して技能成績の如何にあらずして、必ず其必要に應ずべきは、人間道徳の命する所にあらずや。社會主義の主張は、社會を以て一大家庭と爲すに在らざる可らず、社會は其父母たらざる可らず、各人は皆な同胞たらざる可らず。而して父母の其兒女に向つて分配する所、先づ其尤も急なる者、例せば食料、衣服、住居及び教育の費より始めて、漸次に其急ならざる者に及ぶ。其量と質とは固より大に異なるなきを得ずと雖も、而も各々十分に其生を遂ぐる所以に至りては、即ち一なるに非ずや。

○若し夫れ分配の價格を平等するの說や、自ら必要に應ずるの分配と其結果を同じくす可し。何となれば、此分配や決して物品の同一を意味する者に非ざるが故に、各人其價格の範圍に於て、自由に自家の必要と嗜好を満足せしむるの物件を求め得可ければ也。但だ其價格の制定極めて困難なり

と爲すのみ。

○要件の第四は、社會の收入の大半を以て個人の私有に歸することは是れ也。

○世人多くは曰く、財産の私有は、個人の自由を保持し智徳を向上するが爲めに極めて必要の事と爲す、而も社會主義は之を禁絶せんとするに非ずやと。財産私有の必要なるは洵に然り、然れども社會主義が之を禁絶せんとすいふに至りては匪妄の甚しき也。否な之を禁絶するは却て現時の産業組織に非ずや。見よ、今の産業組織の下に在ては、社會の財富は常に一部の地主資本家の手に集中し、社會全體をして決して其自由を保持し智徳を向上するに足るべき財産の所有を許さざるに至れるに非ずや。而して彼等多数は漸次に無一物となり、其日暮しとなり、所謂「賃銀奴隷」の境涯に墮落しつゝ、あるに非ずや。

註12 無いことをいってうそをいう。

○社會主義の制度は即ち之に反す。社會的歳入の大半を以て各人に分配して以て之を私有せしむ。故に公共生産の發達し社會的収入の増加するに従つて、個人の私有亦益々富厚にして、各其所好に従つて消費し若くば貯蓄するを得、又其匱乏の爲めに他人に依頼することを要せず、他人の爲めに制せらるゝの憂ひなし。如此にして社會主義は實に財産私有の制を擴張して、以て萬人の自由を保

障し、其向上を促進せんことを欲する也。

○但だ知らざる可らず、社會主義は私有の財産を増加すと雖も、此財産や實に各人の消費に充つるの財産にして、決して土地資本、即ち生産機關を意味する者に非ざることを。生産の機關が必ず公有たるべくして、其生産の結果が必ず一たび社會の収入たるべきは、固より前に言へるが如し。

○論者又曰く、夫れ私有の財産富厚なるに至れば、節儉なる者は之を貯蓄し、資本として使用する者あるに至らん、果して如此なれば直ちに資本家の階級を生じて、貧富の懸隔する舊の如くならんと。然れども産業の方法規模益々尨大なるに従つて、唯だ共同的經營に待つべくして、決して個人の支持に堪へざるに至るべきは、現時の狀勢既に之を證せり。若し然らざるも、一切の生産機關既に公有となり、重要な産業が總て社會公共の手に管理さるゝの時に於ては、一個人は又其私有の財産を資本として投ずるの機會有ること無けん。假に此類の私業を企圖して、之に放棄する者有りとすも、曷ぞ能く社會公共の大産業と競争兩立することを得んや。眞に是れ蠅牛角上の蚊のみ、以て全體の組織を損傷するに足らざる也。

○更に知らざる可らず、吾人は社會的収入の「大半」を私有す可しと云ふ、其全部と云ふ者に非ざること。社會生産の目的や、一に吾人需用の満足に在りと雖も、而も吾人需用の満足は、必しも

之を私有することを要せざる者多し。現時に在ても、學校、公園、道路、音樂會、圖書館、博物館の如き、共有の財産として、各人の必要と嗜好を満足せしめんが爲めに、自由に之を使用することを許せり。將來經濟組織益々統一し、社會的道德益々發達することを得ば、社會的収入を公共的に使用し、以て公共の利益、進歩、快樂を圖るの風亦愈々盛んなる可きが故に、諸種の收入財産の共有として存する者、今日に比して更に著大の増加を見ん也。

○イリーの所謂社會主義の四個の要件は上の如し。予は之に依て略ぼ其主張の在る所を窺ふを得たるを信ず。然り社會主義は實に此等要件の實現を以て、社會産業の歴史的進化に於ける必然の歸趨と爲す者也。

○故にミルは定義して曰く、「社會主義の特質とする所は、生産の機關と方法を以て社會人員全體の共有と爲すに在り。従つて其生産物の分配も、亦公共の事業として、其社會の規定にする所に準じて行はれざる可らず」と。

註13 J.S.Mill 一八〇六—一八七三、英國の哲學者、經濟學者。彼の著「經濟學原理」に於て代表される如く彼は古典學派の代表者である。他面亦社會政策學派の創始者であり、自由主義思想の代表者として、十九世紀後半のイギリス思想界に著大の影響を興えた。彼は亦サン・シモンの影響をうけて精社會主義

的傾向を帯びている場合もある。尙彼の「自由論」は著名である。

○カークアップは「エンサイクロペヂヤ・ブリタニカ」に記して曰く、「現時私人の資本家が賃銀労働者を使つて經營せる所の工業は、將來に於ては聯合若くは共同の事業として、即ち萬人共有の生産機關に依て行はれざる可らず。社會主義に於ける骨髄のプリンシプルとして承認さる可きは、其理論に見るも其歴史に徴するも一に是に外ならず」と。

註14 Encyclopaedia Britannica, 「大英百科全書」と呼ばれるもの。初版は一七六八年三巻發行、一九二九年には第十四版を重ね二十三巻(外に地圖、索引一巻)となつてゐる著名な百科辭典。

註15 Associate

註16 Cooperate

註17 Principle 原理、原則。

○マルクスの女婿にして佛國マルクス派の首領たるパウル・ラフワルギニは曰く「社會主義は如何なる改良家の企畫にもあらず。唯だ現在の組織が既に重大なる經濟的進化の運に迫れることを信じ、而して此進化の結果や、即ち資本私有の制は變じて労働者團體の共同的所有之に代るべきことを信する人々の教義也。故に社會主義の特質は、其歴史的發見の點に在り」と。

註18 Poul, Lafargue. 一八四八—一九一一、フランスの社會主義者。マルクスの次女ローナ(Louise)と結婚した。グーロと共に「フランス労働黨」を創立、マルクス主義を信奉實踐する。

註19 Reformar

註20 System

註21 Doctrina 「ドクトリン」と發音する。

○エンゲルは更に曰く「社會が生産機關を掌握するや、商品の生産は即ち途を絶つ可し、而して生産者は又生産物の爲めに制御せらるゝことなけん、社會的生産の無政府は一掃して、之に代る者は即ち規律統一ある組織ならん、個人的生存争闘は消滅せん。如此にして人は初めて禽獸の域を脱して、眞個に其人たる所以の意義を全くすることを得可し」と。

註22 前掲エンゲルス「社會主義の發展」(4)

○然り、果して如此くならば、資本家は即ち廢滅せらる可し、労働者は賃銀の桎梏を脱す可し、各人は社會の爲めに應分の労働を供給して、社會は各人の爲めに必要の衣食を生産す。分配あつて商業なし、統計あつて投機なし、協同あつて争闘なし、豈に又生産過多あらんや、豈に又恐慌の襲來あらんや、人は決して富の爲に支配せらるゝことなくして、能く富を支配することを得可き也。於

是て現時産業組織の矛盾より生ずる百害は爲めに掃蕩せられて、能く自然の調和を全くすることを得べき也。

註23 種はあしかせ、指はつかせ。

註24 互に怒り争うこと。

杖底唯我。囊中唯月。不勞關市之關。

石竹讀書。漁翁洗屐。豈供山澤之稅。

杖底唯我。囊中唯月。關市の關を勞せず。

石竹讀書。漁翁洗屐。豈に山澤の稅を供せんや。

第五章 社會主義の效果

○説て此に至らば、一國の疑惑は雲の如く、油然として直ちに衆人の心頭を衝て起る者あらん、何ぞや。

○曰く、古來人間の氣力奮揚し、智能練磨し、人格向上することを得る所以は、實に生存競争のあ
るが爲めに非ずや。若し高人衣食の慮る可きなく、富貴の進取すべきなく、賢愚強弱皆な平等の生
活に安んぜざる可らずと爲さば、何物か又吾人の競争を鼓舞せんや。競争なきの社會には即ち勳勉
なけん、勳勉なきの社會には、即ち活動進歩なけん、活動進歩なきの社會は、即ち停滞、墮落、腐
敗あるのみ、社會主義實行の效果は、唯如此きに止まらざる乎と。

○獨り庸衆の、這個の杞憂を抱けるのみならず、碩學スペンサーの如きすら亦曰く「社會主義の制
度は總て奴隸制度也」と。ペンツヤミン・キッドも亦其大著「ソシアル・エヴォルーション」中に論
じて曰く「個人の生存競争は、實に社會あつて以來のみならず、實に生物あつて以來、常に進歩
の遅たる者也、而も社會主義の目的は全く之を銷滅するに在り」と。而して今の地主資本家に阿媚

して自ら利する者あらんとするの徒、亦此種の言説を誇張し、以て社會主義の大勢に抗する唯一の
武器と爲すもの、如し。

註1 平凡なヤカラ。おろかな衆。

註2 無用の心配、とりこし苦勞。

註3 大學者。

註4 Herbert, Spencer 一八二〇—一九〇三、イギリスの哲學者。社會を生物學的に見、(社會有機説)道徳を

進化論的功利主義の立場から解釋した。

註5 Benjamin Kidd 一八五八—一九一六、イギリスの社會學者、'Social Evolution' (社會進化論) を出版

して雅名となる。

註6 こびへつらう。

○夫れ社會主義の爲す所にして、果して個人の自由を奪ひ社會の進歩を休せしむる彼等の言の如く
ならん乎、其唾棄すべきや論なし。然れども是れ誤謬也、誤謬にあらずんば即ち論証也。

○思へ所謂生存競争が社會進化の大動機たるは、豈に彼等の言を待て後知らんや。而も古來社會の
組織が漸次其状態を異にするに至るや、之を刺撃し活動せしむる所以の競争其物も亦従つて其性質
方法を異にせざることを得ず。腕力の競争が智術の競争となれるを見よ、個人の競争が團體の競争

となれるを見よ、武器の競争が辯説の競争となれるを見よ、掠奪の競争が貿易の競争となれるを見よ、侵略の競争が外交の競争となれるを見よ、生存競争の性質方法が、常に社會の進化に伴うて進化せるの迹を見る可らずや。

○而して見よ、現時の經濟的自由競争が殖産的革命の前後に於て、世界商工の發達に與つて大に力ありしことは、予も亦之を疑はず、然れども此等競争を必要とせし時代は既に過ぎ去れり。今や自由競争は果して何事を意味すとす乎、唯だ少數階級の暴横に非ずや、多數人類の痛苦に非ずや、貧富の懸隔に非ずや、不斷の恐慌に非ずや、財界の無政府に非ずや。是れ實に社會の進化に益なきのみならず、却て其墮落を長ずる者に非ずや。如此にして吾人は猶ほ其保存を希ふの理由ある乎。

○太初蠻野の時に於てや、暴力の闘争は社會進化の爲めに其唯一の動機たりき、而も今日に於ては直ちに一個の罪惡に非ずや。若し競争は進歩に必要なが故に、暴力も之を禁ずるを得ずと言はば、誰か其無法を笑はざらんや。今の自由競争を以て必要となすの愚は實に之に類せずや。

○且つや眞個の競争を試む、必ずや先づ競争者をして平等の地位に立たしめざる可らず、其出發點を同じくせしめざる可らず。而も今の競争や如何、一は生れながらにして富貴也、衣食足り、教育足り、加ふるに父祖の積與せる地位と信用と資産とを以てす、他は貧賤の子也、凍餒窮苦の中に長

じ教育なく資産なく、地位なく信用なし、有る所は唯だ未練々の五尺蠶のみ。而して此兩者を直ちに競争場裡に投じて長短を較せしむ。而して其勝敗の決を見て嗚采して曰く、是れ優勝劣敗也と、是れ豈に残虐なる虐待に非ずや、何ぞ競争たるに在らんや。

註 7 はせかのこと。

○然り今の自由競争や、決して眞個公平の競争に非ざる也、今の禍福や決して動情の應報に非ざる也、今の成敗や決して智慧の結果に非ざる也。運命のみ、偶然のみ、富貴を引くと一般のみ。

○否な所謂自由競争の不公なるのみならず、此等不公の競争すらも、今や殆き之を試むるの餘地なきに至らんとす。見よ、世界産業の大部は既に偶然を伴伴せる資本家の獨占となれるに非ずや、世界土地の大部は、既に運命の恩寵ある大地主の兼併に歸せるに非ずや。而して資本を有せざる者及び土地を有せざる者は、唯だ彼等の奴隸たるの外なきに至れるに非ずや。然り自由競争の名は美也、而も事實に於て經濟的競争は竟に其迹を絶たずんば已まず、豈に特に社會主義の之を廢絶することを持たんや。

○於是乎生存競争の性質方法は、更に一段の進化を經ざることを得ず。社會主義は實に這個進化の理法を信じて、社會全體をして此理法に従はしめんと欲す。然り現時卑陋の競争を變じて高尚の競

争たらしめんと欲す、不公の競争を變じて正義の競争たらしめんと欲す、換言すれば即ち衣食の競争を去て、智慧の競争を現せんと欲する也。

註9. こゝろのくくすこと

○試みに思へ、人生の進歩向上にして、單に激烈なる衣食の競争の結果なりとせん乎、古來高材進足の士は必ず社會最下層の窮民中に出づべきの理也。而も事實は之に反す、人物が多く富貴の家に生ぜざると同時に、貧賤者の中に出づること亦甚だ稀なるに非ずや。他なし富貴の階級や、常に保固階級の爲めに固執せられて、志願り氣餒る、徒らに快樂の奴となり、窮乏の民や終生衣食の爲めに進々として、唯だ飢凍に免る、に急なれば也。

註9. こびおもなり、へのらう。

○然り高尙なる品性と偉大の事業とは、決して社會貧富の兩極端に在らずして、常に中間の一階級より生ずる者也。彼れ夫れ實財ありと雖も未だ彼等を腐敗せしむるに足らず、勤勞を要すと雖も、未だ彼等を困倦せしむるに至らず、猶ほ其智能を磨くの餘裕有り、心氣を奮ふの機會多ければ也。見よ封建の時に於て武士の一階級が其品性の尤も高尙に、氣力の尤も旺盛に、道義の徳く維持せられたる所以の者は、實に彼等が衣食の爲めに其心を勞するなくして、一に名譽、道徳、眞理、技能

の爲めに勤勉競争するの餘裕機會を有せしが爲めに非ずや。若し彼等にして初めより衣食の爲めに競争せざる可らざらん乎、直ちに當時の「素町人根性」に墮落し去らんのみ、豈に所謂「日本武士道」の光榮を盡ふことを得んや。

○蓋し富人を賤賤するに、其天國に入り難きを以てし、貧しき者は幸福なりと曰へり。然れども知らざる可らず、當時の猶太の貧民は、漁農を務め、工藝を勤み、以て獨立の生を營めるの中等民族にして、決して今日多數の實銀的奴隷と同視すべきに非ざることを。而して社會を擧げて是等中等民族と爲さんとするは、是れ社會主義の目的とする所に非ずや。

○爰に人あり、雇主の叱咤を恐る、が爲めに非ず、財貨の報酬を望むに非ず、唯だ工作を愛するが爲めに建築に従事すとせよ、唯だ神來に乗じて其大筆を揮洒すとせよ。彼等の藝術は如何に其眞を得、善を得、美なるを得べきぞや。其他幽奥なる哲理の探討や、精進なる科學の研究や、如此にして始めて大に其光彩を放つべきに非ずや。

註10. 筆をふるい墨をすすぐ、すなわち書畫をかゝる。

○更に一面より見る、現時社會の墮落と罪惡の大半は實に衣食の匱乏に因す、金錢の競争に因す。家庭の平和も之が爲めに害せられ、婦人の節操も之が爲めに汚され、士人の名譽も之が爲めに損せ

られ、而して一國一社會の風教、道德之が爲めに壊敗せらる。見よ現時我國監獄の囚徒七萬人、而して其罪狀の七割は實に財貨に關する者也といふに非ずや。古人言ひ得て佳し、「金が敵の世の中」なりと。若し世に金錢の競争なかりせば、社會人心は如何に純潔なる可りしぞ、少くも今の罪惡は其大半を掃蕩す可きに非ずや。而して能く吾人の爲めに、金錢てふ怨敵を滅絶し、衣食競争の疆域を脱せしむる者は社會主義に非ずや。ウィリアム・モリスは曰く、「人が財貨の爲めに心を勞するなきに至るも、技藝、萬有、戀愛等は、人生に與ふるに趣味と活動とを以てす可し」と。是等の趣味と活動は、吾人の爲めに更に正義高尚なる自由競争を開始して、以て社會の進化を促進するを得ん也。

註11 William Morris 一八三四—一八九六、イギリスの詩人、晩年空想的社會主義に傾く。

○言ふこと勿れ、衣食の慮る可きなくんば、人は勤勉することなげんと。人の勤勉を促す者、豈に唯だ財貨のみならんや。人間の性情は未だ如此く汚下ならざる也。見よ彼の深山大海の探險や、學術上の發明や、文學美術の大作や、其他各々好む所に従ひ適する所に向つて其技能を試むるに當つてや、心中獨り自ら愉悅に堪へざるもの無くんばあらず。況んや之に加ふるに多大の名譽光榮の關ゆるありとせば誰か欣然として其勤勞に眼せざる者あらんや。少年の學生が孜々として學ぶ者は、

決して衣食の爲めにするに非ざる也。兵士の奮闘して死に趨くは、決して衣食の爲めにするに非ざる也。

註12 つとめて倦まざるま。

○現時勞働者の大抵勤勞を厭うて、動もすれば安逸を食ふの狀あるは、予も亦之を認む、然れども是れ豈に彼等の罪ならんや。夫れ演劇を觀、角瓶を樂む者と雖も、其長きに及べば即ち倦怠を感じず。況んや惡衣惡食にして、一日十數時間の勤勞に服す、以て少壯より老衰に至る、何の希望なく、何の變化なく、何の娛樂なし。而して其事業や必しも其好む所に非ざる也、唯だ衣食の爲めに驅らるゝのみ。而して彼等が勤勞の功果や、其大部は即ち他人の爲めに掠奪せられて彼等は僅に其生命を支ふるに過ぎざるに非ずや。之を如何ぞ疲勞厭倦せざることを得んや。然り今の勞働者が衣食の爲めに驅らるゝや、牛馬の如し、彼等の心身は既に其鞭笞に堪へざるに至れり。彼等が懶惰を以て其樂園と爲すに至れる者、一に現時社會組織の弊害之を致せるのみ。

註13 すもうのこと。

○夫れ人は其勤勞の長きに堪へざるが如く、亦逸豫の長きに堪へず。試みに今日の勞働者に向つて、汝の衣食は給せらるべし、汝はより勤勞を要せずと言はば、彼等は初め喜んで其情眼を食ら

ん。而も如此き者數日ならしめよ、十數日ならしめよ、數月ならしめよ。彼等は漸く其徒然無爲に飽きて、必ずや多少の事業を求むるに至るや明らか也。

註14 あそびたのしむ。

註15 つれづれなるさま。

○故に社會主義制度の下に處して、衣食あり、休息あり、娛樂あり、而して後其好む所、適する所に従つて、一日三四時乃至四、五時其強健の心身を勞して社會に奉ずるが如きは、却て是れ一種の満足たらずんばあらず。苟くも人心ある者誰か敢て遺憾せんや。「勞働の神聖」てふ語は、於して初めて意義あることを得ん也。

註16 會をかあわしてさける。

○若し夫れ社會主義を以て個人の自由を没却すといふに至つては、妄之より甚しきは莫し。予は先づ此言を爲すの人に向つて反問せん、現時果して所謂個人の自由なる者ありやと。

○宗教の自由は之れ有らん、政治の自由は之れ有らん、而も宗教の自由や、政治の自由や、凍餒の人に在ては、一個の空名に過ぎざるに非ずや。所詮經濟の自由は總ての自由の要件也、衣食の自由は總ての自由の樞軸也、而して今果して之れ有る乎。

○米國労働者同盟第十三回大會に於けるヘンリー・ロイドの演説の一節は、答へ得て痛切也、曰く「米國獨立の宣言や、昨日は自治(セルフ・ガバメント)を意味せりき。今日は即ち自業(セルフ・エンプロイメント)を意味す。眞個の自治は即ち自業ならざる可らず。……而も今や労働者が其爲す可き所を爲し得ず、其要する所を與へられざるは、滔々皆然らざるなし。労働者は労働の八時間ならんことを欲す、而も彼等は十時間、十四時間、十八時間の労働に服せざる可らず。彼等は其子女を學校に送らんと欲す、而も却て之を工場に送らざる可らず。彼等は其妻の家庭を治めんことを欲す、而も却て之を機器車輪の下に投ぜざるを得ず。彼等は病で靜養を欲するの時、猶ほ勞働せざるを得ず、勞働を欲するの時却て解雇の爲めに失業せざることを得ず。彼等は職業を乞うて得ざる也、彼等は公平の分配を得ざる也。彼等は他人の私慾若くは野望の爲めに、彼等自身の、彼等の妻の、彼等の子女の、四肢體軀、健康、生命すらも犠牲に供せざることを得ず」と。豈に獨り工場の労働者のみならんや、今の世に處して生産機關を有せざる者は、其生活の不安にして苦痛なる、皆な然らざるなし、而も彼等は呼んで曰く自由競争也、自由契約也と。是れ強制的競争のみ、是れ壓抑の契約のみ、何の自由か之れ有らん。

註18 Self Employment.

註19 流れるごとく、世の風潮を追つて行くこと。

○社會主義の主張する所は、實に這個の強制を脱せしめんとするに在り、這個の壓抑を免れしめんとするに在り。一八九一年エルフルト大會に於ける獨逸社會民主黨の宣言書の一節は曰く「這個社會的革命は、特に勞働者の解放のみならず、實に現時社會制度の下に苦惱せる人類全體の解放を意味す」と。思へ社會主義一たび實行せられて、天下雇主の爲めに驅使せらるゝの被雇者なく、權威に壓抑せらるゝの學者なく、金錢に束縛せらるゝの天才なく、財貨の爲めに結婚する婦人なく、貧窮の爲めに就學せざるの兒童なきに至らば、個人的品性の向上せられ、其技能の修練せられ、其自由の伸張せらるゝ、果して如何ぞや。

註20 一八七五年結成されたドイツ社會労働黨は、一八九〇年ハルレ大會に於てドイツ社會民主黨と改稱、翌一八九一年エルフルト(Erfurt)の大會ではマルクス主義とラッサール主義との折衷的綱領であるゴータ綱領を改め、純粹にマルクス主義に立脚する綱領を定めた。

註21 Emancipation

○ミルは曰く「共產主義に於ける檢束は、多數人類に取て、現時の狀態に比して、明かに自由なる

者あらん」と。彼の所謂共產主義は即ち今の社會主義を意味する者也。

○然り宗教革命は吾人の爲めに信仰の桎梏を撤したりき、佛國革命は吾人の爲めに政治の束縛を免れしめき。而して更に吾人の爲めに衣食の桎梏、經濟の束縛を脱せしむる者は、果して何の革命ぞや。エンゲルは即ち社會主義を稱して曰く「是れ人間が^{キヤンダム}必要の王國より一躍、自由の王國に上進する者也」と。

註22 Necessity 普通「必然」と譯すが正し。

註23 Kingdom

○夫れ唯だ「自由の王國」也。是を以て社會主義は國家の保護干渉に頼る者に非ざる也。少數階級の慈善恩恵に待つ者に非ざる也。其國家や人類全體の國家也。其政治や人類全體の政治也。社會主義は一面に於て實に民主主義たる也、自治の制たる也。

○今の國家や唯だ資本を代表す、唯だ土地を代表す、唯だ武器を代表す。今の國家は唯だ之を所有せる地主、資本家、貴族、軍人の利益の爲めに存するのみ。人類全體の平和、進歩、幸福の爲めに存するに非ざる也。若し國家の職分をして如此きに止まらしめば、社會主義は實に現時の所謂「國家」の權力を減殺するを以て、其第一着の事業と爲さざる可らず。然り封建の時に於ては人類、人類を支配

したりき、今の經濟制度の下に於ては、財貨、人類を支配せり、社會主義の社會に在ては、實に人類をして財貨を支配せしめんと要す、人類全體をして萬物の主たらしめんと要す。豈に奴隷の制ならんや。豈に個人を没却する者ならんや。否な人生は此如にして初めて其眞價を發揚す可きに非ずや。

○社會主義は、現時國家の權力を承認せざるのみならず、更に極力軍備と戰爭とを排斥す。夫れ軍備と戰爭とは、今の所謂「國家」が資本家制度を支持する所以の堅城鐵壁とする所にして、多數人類は之が爲めに多大の犠牲を請求せらる。今や世界の諸國は軍備の爲めに、實に二百七十億弗の國債を起し、而して單に之が利息のみにして、常に三百萬人以上の勞働を要すといふに非ずや。

加之、幾十萬の壯丁は常に兵役に服し、殺人の技を習つて無用の勞苦を嘗めざる可らず。獨逸の如き、壯丁の多數は皆な兵士として徴集せられ、田野に耕耘する者は、半白の老人若くは婦女のみなりといふ。嗚呼是れ何等の悲慘ぞや。況んや一朝戰爭の破裂に會ふや、幾億の財帛を糜し、幾千の人命を損して、國家社會の瘡痍永く癒ることを得ず、贏す所は唯だ少數軍人の功名と、投機師の利益のみ。人類の災厄罪過豈に之に過ぐる者あらんや。

○若し世界萬邦、地主資本家の階級存するなく、貿易市場の競争なく、財富の生産餘多にして、其分配公平なるを得、人々各其生を樂しむに至らば、誰が爲めにか軍備を擴張し、誰が爲めにか戰爭

を爲すの要あらんや。是等悲慘なる災厄罪過は爲めに一掃せられて、四海兄弟の理想は於て是乎始めて實現せらる、を得可き也。社會主義は一面に於て民主主義たると同時に、他面に於て偉大なる世界平和の主義を意味す。

○故に予は茲に再言す。社會主義を以て競争を廢止する者となすこと勿れ、社會主義は衣食の競争を廢止す、而も是れ更に高尚なる智徳の競争を開始せしめんが爲めのみ。勤勉活動を沮礙すと云ふこと勿れ、社會主義の除去せんとするは、勤勉活動にあらずして人生の苦惱悲慘のみ。個人を没却すといふこと勿れ、社會主義は却て萬人の爲めに經濟の桎梏を脱却して、十分に其個性を發展せしめんと欲するに非ずや。奴隷制度なりと云ふこと勿れ、社會主義の國家は階級的國家に非ずして、平等の社會也、專制的國家に非ずして博愛の社會也、人民全體の協同の組織を爲して、以て地方より國家に及び、以て國家より世界に及び、四海平和の惠福を享受せんとする者に非ずや。

○果して能く如此しとせば、誰か又社會主義的制度的下に在て、人間品性の向上、道德の作興、學藝の發達、社會の進歩が今日に比して更に幾層幾倍なるを疑ふ者ぞ。

職事者。身在事外。宜悉利害之情。

事を議する者は。身事外に在つて。宜しく利害の情を悉すべし。

任事者。身居事中。當忘利害之慮。

事に任ずる者は。身事中に居つて。當に利害の慮を忘るべし。

第六章 社會黨の運動

○且く一切生産機關の公有、曰く富財の公平なる分配、曰く階級制度の廢絶、曰く協同的社會の組織、之が實行や洵に一大社會的革命也。然らば則ち社會黨は革命黨なる乎、其運動は革命的運動なる乎。曰く然り。

○然れども法蘭西の貴族よ、小心の富豪よ、輕慢の有司よ、乞ふ恐る、勿れ。今の社會黨は漫に爆彈を公等の車馬に投ぜんとする者に非ざる也、敢て鮮血を公等の邸第に灑まんとする者に非ざる也。但だ公等と俱に與に大革命の德澤に沐浴せんと欲するのみ、恩惠に光被せんと欲するのみ。

註1 おくびよう。

註2 おちつかずさわがしいこと。

註3 ふむこと。

○思へ古今何の時か革命なからん、世界何の邦か革命なからん、社會の歴史は革命の記録也、人類の進歩は革命の功果也。試みに思へ、當年の英國、クロムエルの起つに會はず、當年の米國獨立を

宣するを得ず、佛國の民、共和の制を建つる能はず、日耳曼諸州聯合の業成らず、伊太利統一せらる、を見ず、日本維新の中興なかりしとせば、世界人類は今や果して何の状を爲すべき乎、現時の文明は果して何の處にか見るべき乎。革命を恐怖する者よ、現時公等が謳歌せる文明と進歩とは、實に過去最多の大革命が公等に奪取せる所に非ずや。

註4 たまもの。

○社會の狀態が常に代謝して已まざるは、猶ほ生物の組織の進化して已まざるが如し。而して其進化や代謝や若し一たび休せるの時は其生物や社會や即ち絶滅あるのみ。永久の生命は必ず暗々裡に進化す、決して常住を許さざる也、社會の狀態は必ず冥々の間に代謝す、決して不變を許さざる也。而して這の暗冥なる進化代謝の過程に於て、毎に明白に其大段落を劃し、新紀元を宣言する者、則ち革命に非ずや。之を譬ふるに歴史は一連の珠數に似たり、平時の進化代謝は其小珠也、革命は其數取りの大珠也、進化代謝の連續なると同時に亦革命の連續たる也。

註5 くらゝさま。

註6 Process.

○ラッサルは曰く「革命は新時代の産婆也」と。此語未だし也、予は將に曰はんとす、革命は産婆

に非ずして、分岐其物也と、何となれば是れ偶然の出來事に非ずして、實に進化的過程の必然の結果なれば也。而して舊時代老いて新時代を生み、新時代の長ずるや、更に他の新時代を生む、皆な革命に依らざるは無し。何ぞ彼の子々孫々の迭に分岐して百世窮極する所なきと異らんや。

註7 Ferthand Lassalle. 一八二五—一八六四、ドイツの社會主義者。熱心な社會主義運動家であつたが、

その立場は國家社會主義的であり改良社會主義的であつた。

註8 かわるがわる。

○但だ分岐に難易あるが如く、革命にも亦難易なきを得ず。分岐が時に母體を切開するの要あるが如く、革命も時に暴動を現するの已むなきに至るあり。而も是れ決して希ふ可きことに非ざるや論なし。

○故に母體の組織發達の如何を診し、之が健康を保ちて以て其分岐を容易ならしめんと期するは、産科醫及び産婆の職務也。社會の組織状態の如何を察し、進化の大勢を利導し以て平和の革命を成さんと希ふは、革命家の職也。而して今の社會黨や實に這個社會的産婆産醫を以て、自ら任とする者に非ずや。

○夫れ然り、革命は天也、人力に非ざる也。利導す可き也、製造す可きに非ざる也。其來るや人之を如何ともするなく、其去るや人之を如何ともするなし。而して吾人人類が其進歩發達を休止せざるを希ふの間は、之を恐怖し懺息すと雖も決して之を遠く可らず、唯だ之を利導し助成し、以て其成功の容易に且つ平和ならんことを期すべきのみ。社會黨の事業や、唯だ如此を要す、曷んぞ漫に殺人叛亂を以て、平地に波を揚げて快とする者ならんや。

○蓋し前世紀の初め、社會黨の陳吾として起てる者、英に在てはオーエン、佛に在つてはカベール、サン・シモン、フーリエー、ルイ・ブラン、獨に在てはワイトリングの徒、其現時制度の害毒を指摘するや頗る痛切に、其理想の實行に着手するや極めて熱心なる者ありき。然れども當時社會主義の發達、日猶ほ淺く、研究未だ精なることを得ざりしが故に、彼等の企畫や遂に一種の空想、即ち所謂「ユトピア」たるを免れざりき。彼等が或は共同生産の工場を起し、或は共同生活の殖民地を拓くや、一に自己の模型に従つて直に社會を改鑄せんとする者なりき。一日一夜にして直ちに理想の世界を現出せんとする者なりき。彼等は人道の上に立てり、而も未だ科學の基礎を得ること能はざりき。彼等は建設を試みたり、而も未だ自然の進化に従ふ能はざりき。其前後相隨で失敗に歸せしは固より其所也。

註9 泰の二世の時、楚の人陳勝と吳廣はじめに秦にそむく。故に事の端緒を置するものを陳吳という。

註10 同(イ)は、一七八八—一八五六、フランスの空想社會主義者。共產主義的思想に立つて空想小説「イカリア旅行記」を著し、その實現のため渡米して共產團體を建設したが失敗した。

註11 W. Weitling, 一八〇八—一八七一、「ドイツ社會主義の父」と呼ばれる、彼の思想は中世的空想的なリスト教的で、渡米して共產村の建設を試みたが失敗した。

註12 Utopia 理想郷。

○是を以て當時の歴史を管見する者、動もすれば曰く、社會黨の運動は一時の狂熱のみ、其企畫はユトピアのみ、到底不可能の事に属す、其自ら消滅するは日を期して待つ可き也と。是れ一を知つて二を知らざる者のみ。夫れ狂熱は冷却すべし、空想は精散すべし、而も眞理は世に永劫に死せんや。近世社會主義は實に是等ユトピアの死灰中より再燃し來れるに非ずや。

註13 わずかに一寸見ろ。

○一八四七年、マルクスが其友エンゲルと共に、有名なる「共產黨宣言」を發表して、所謂階級戦争の由來經過を詳論し、以て萬國勞動者の同盟を呼號してより以來、社會主義は厥乎として一個科學的教義となれり、又當時の空想狂熱に非ざる也。社會黨は既に社會が一種の有體なることを解せり、又自己團體の模範に従つて之が改造を企つる者ある無き也。彼等は歴史の

進化を信ぜり、決して一日にして其革命の成功すべきを夢みる者に非ざる也。

註14 Manifesto of the Communist Party.

○彼等は單に一小組合の共同生活が、必ず社會全體の競争の爲めに蹂躪さるべきを見たり。彼等は世界の形勢と隔絶して完全なる理想郷を單に一地方に建設するの、到底不可能なることを驗せり。是を以て彼等は決して社會全體の調和を破壊することなくして、着々其主義勢力を擴張し、史的進化の自然に従つて徐々に其抱負政策を實行し、寸を得れば即ち寸を守り、尺を得れば即ち尺を保ち、遂に理想の完成に達せんと欲するに至れり。而して彼等が之を爲すの術如何。

○他なし、彼等は無政府黨に非ず、個人の兇行は何物をも得べきに非ざるを知る、其運動や必ず團體的ならざる可らず。彼等は虛無黨に非ず、一時の叛亂が何事をも成すべきに非ざるを知る、其方法や必ず平和的ならざる可らず。然り彼等の武器や、唯だ言論の自由あるのみ、團結の勢力あるのみ、參政の權利あるのみ。於是乎萬國の社會黨は、皆な政治的方面に向つて其運動を開始せり。

○思へ社會主義にして、果して世界の輿論となるを得たりとせよ、社會人民の多數は則ち社會黨員となれりとせよ、而して彼等は普通選挙の制に依て盡く參政の權利を得たりとせよ、而して社會黨代議士は各國議會の多數を占め得たりとせよ、其他市行政の機關、町村自治の團體、皆社會黨に

依て運轉し指導せらるゝに至るとせよ、彼等は自在に社會組織の改善に着手することを得べきに非ずや。

○但だ各國人文の程度、歴史の結果、社會の状態を異にするに従つて、之が改造の順序方法亦自ら異ならざるを得ず。事の緩急、物の輕重、其時と人との宜しきに從ふ可きが故に、其細目は豫め之を決定す可きに非ずと雖も、凡そ参政の權利を多數人民に分配し、婦幼を保護し、教育を無料にし、勞働時間を制限し、勞働組合を公許し、工場設備を完全ならしむるが如きは、第一着の事業ならずばあらず。而して或は一部より、或は一地方より、或は資本に於て、或は土地に關し、漸次に少數階級の特占の權利、壟斷の利益を減殺して、之を社會人民全體の用に移すの政策を實行し、歩は一步より、層は一層より、進んで而して已むことなくば、一日一切の生産機關を擧げて、盡く社會の公有に歸する者、世に難からんや。

○然り社會黨が運動の方針や如此し、而して其實際の功果成績に至りては、真に刮目に値ひする者ある也。ラサールが「嗚呼此間愚の勞働者は、何の時か其昏睡より醒む可き」と嘆息せしは、僅に四十年の前なりき。而して四十年後の今日に於て、獨逸の社會主義者は、既に二百五十萬人を以て算せられ、八十餘人の代議士を有する也。佛國の社會主義者亦實に百五十萬の多きに達し、四十餘

人の代議士を有する也。英國の議會や、特に社會黨と自稱するの議員尙ほ少しと雖も、而も同國の二大政黨は近時競つて社會主義的政策を採用するに至れり。ハーコート曾て議會に演説して「今や吾人は皆な社會黨也」と公言せる者、決して虚ならざるを見る。若し夫れ各都市の行政は、大抵社會主義者に依て指導せられざるはなま也。其他歐洲列國、北米諸邦、苟くも近世文明の在る處、曾て社會黨の生ぜざるはなく、社會黨の生ずる處、其勢力の發達は飛瀑の天より下るが如く、主義の擴張は猛火の原を燎くが如きを見ずや。

註15 Sir William Harcourt 一八二七—一九〇四、イギリスの政治家、自由黨の黨首であつたが、黨の帝國主義的傾向にあきだらず辭任した。

○夫れ文明の邦、立憲の治下に於て、社會の輿論一たび我に歸し、政治の機關、亦我手中に歸するに至らば、兵馬の力も之を如何せんや、警察の權も之を如何せんや、而して富貴の階級亦竟に之を如何ともすることなけん。社會主義の大革命が、正々堂々として、平和的に秩序的に、資本家制度を葬り去つて、マルクスの所謂「新時代の生産」を宣言することを得るは、猶ほ水到つて渠成るが如けん也。

註16 水が流れ来て自然にみぞが出来る。

○嗚呼革命よ、如此にして來り如此にして去る。而して吾人に責賜するに、平和と進歩と幸福とを以てす。予は社會百年の爲めに其助成し歓迎すべきを見る、未だ難忘し恐怖すべきを見ざる也。

蒲柳之姿。 盤秋而零。 蒲柳の姿。 秋を避んで零ち。

松柏之實。 霜霜彌茂。 松柏の實。 霜を耐えて彌々茂し。

第七章 結論

○果然、病源は發見せられたる也。謎語豈に解決せられざらんや。

○殖産的革命は社會組織進化の一大段落を宣告せり、産業の方法は、個人の經營を許すべく、餘りに大規模となれる也。生産力は個人の領有を許すべく、餘りに發達膨大せる也。故に彼等は其性質の社會的なるを承認されんことを要求す、其領有の共同的ならんことを強調す、其分配の統一あらんことを命令す、而も聽かれざる也。是を以て競争となり、無政府となり、弱肉強食となり、獨占となり、社會多數は是等獨占的事業の犠牲に供せらるゝに至る。

○故にエンゲルは曰く「社會的勢力の運動や、其盲目なる、亂暴なる、破壞的なる、毫も自然法の運動に異なるなし。而も吾人一たび其性質を理解するに及んでや、隨意に之を驅役して以て自家の用を爲さしむるを得る、猶ほ電光の通信を助け、火焰の煮炊に供するが如し」と。然り現時社會が生産機關發達の爲めに利せらるゝ、なくして、却て之が暴虐に苦しむ所以の者、一に社會進化の法則に特反するが爲めのみ。若し一たび其性質趨勢を理解して之を利導せん乎、猶ほ人を驚し人を焚く

の電光火焔が、吾大必須の利器となるが如けん也。

○今に於て怪しむ勿れ、學術の日に進んで徳義の日に頽る、ことを、生産益々多くして、萬民益々貧しきことを、教育愈々盛にして罪惡愈々多きことを。嗚呼是れ一に現時の生産機關私有の制度之をして然らしむるのみ。個人をして、今の生産機關を私有せしむるは、猶ほ狂人をして利刃を持せしむるが如し、自ら傷け、人を傷けずんば已ます。

○而して其結果や即ち分配の不公となれり、分配の不公は即ち多數人類の貧困と少數階級の暴富となれり。暴富なるものは即ち驕奢となり、腐敗となり、貧困なるものは即ち墮落となり、罪惡となり、暴世酒々として江河且に下る、海に必至の勢ひのみ。

○故に今日の社會を教うて其苦痛と墮落と罪惡とを脱せしむる、貧富の懸隔を防止するより急なるは無し。之を防止する、富の分配を公平にするより急なるは無し。之を公平にする、唯だ生産機關の私有を廢して、社會公共の手に移すに在るのみ。換言すれば即ち社會主義的大革命の實行あるのみ。而して是れ實に科學の命令する所、歴史の要求する所、進化的理法の必然の歸趣にして、吾人の避けんと欲して避く可らざる所にあらずや。

○嗚呼近世物質的文明の偉觀壯觀は、如此にして始めて能く眞理、正義、人道に合することを得可

きにあらずや。眞理、正義、人道の在る所、是れ自由、平等、博愛の現する所に非ずや。自由、平等、博愛の現する所是れ進歩、平和、幸福の生ずる所に非ずや。人生の目的唯だ之れ有るのみ、古來聖賢の理想、唯だ之れ有るのみ。エミール・ゾーラ叫んで曰く「社會主義は驚嘆すべき救世の救義也」と。豈に我を欺かんや。

註一 Emile, E. C. A Zola. 一八四〇—一九〇二、フランスの小説家、自然主義の頭首と仰がれた。

註二 Wonderful!

○起て、世界人類の平和を愛し、幸福を重んじ、進歩を希ふの志士、仁人は起て。起つて社會主義の弘通と實行とに力めよ。予不敏と雖も、乞ふ後へに従はん。

人生不得行胸懷。 壽百歳猶天也。 人生胸懷を行ふを得ずんば、壽百歳と雖も猶を天なるがごとし。

青天白日處節義。 自暗室陋屋中培來。

旋乾轉坤的經綸。 自幽深廣薄處操出。

青天白日節義に處し。暗室陋屋の中より培い來る。

旋乾轉坤的經綸を的す。幽深廣薄の處より操り出る。

著者略譜

安部磯雄が慶應元年、木下尚江が明治二年、堺利彦が明治三年、著者は明治四年九月に生れてい
る。明治中年から末期にかけてこの著名な社会主義運動家達は大陸三・四歳の違いで相寄り相扶け
て苦難の途を歩いている。こゝでは主として著者の日記に基づいて略歴を記すことにした。その方
が著者の生活がはつきり映つて親しみ易いと思ふからである。

幸徳秋水本名は傳次郎、明治四年九月二十二日夜八時半土佐幡多郡中村に生る。父は篤明、通稱
は嘉平次と云つた。

明治十二年修明舎という學舎で孝經の素讀を授けらる。

明治十四年夏、中村中學校に入る。

明治十八年中村中學校廢せらる。生徒多く修學の途を失ふ。此の多より學友多く湊成會という結
社を作り、學舎を地藏寺という無住寺に設く。此の頃より酒を飲むことを覺えた。この頃又會員は
討論會と牛肉を食ふことのみを仕事とした。繪入「自由新聞」の讀者となる。

内閣官制改革、海軍大臣、總理大臣。

明治十九年一月十八日、年長の人々と宿毛すくもに行き林有造を訪い、その上京の途を中村に立寄らう依頼した。この頃頼りに宿毛に往來した。年長者が縣會議員選挙に運動するのを見學す。二月、板垣退助辭職のため、中村に来る。有志迎えて小宴を張る。秋水はじめてその席で自由の泰斗なるものを見た。板垣はその席で人民の自由の必要、明君賢相の人民の進歩に害あること、青年の身體を強壯にすべきことを語り、秋水は祝辭を朗讀した。

同年二月二十二日、海路高知に遊學す。木戸明の遊厚義塾に寄寓す。助産院に罹る。五月八日高知市本町自然堂病院に入院、病重く顔死の状態であつたが、八月小康を得たので郷里中村へ歸る。この二十一日洪水來り、身を以て山上の天神社内に遁る。

明治二十年一月再び木戸の塾に入り、中學校に通學す。七月下旬に入り、八月十七日高知に赴くと歸して郷里中村から上京の途に上る。家を出る時路銀僅かに五十錢。二十日高知に着く。井上伯の條約改正談判物議を惹き、谷干城農相を罷め、板垣高知に歸り、谷・板垣の建白書が詔かに附寫されて全國に流布し四方の壯士結束して起ち、人心洶々。書籍「史記」「八大家文」を賣り四圓五、六十錢を得、八月再木戸塾、同日再船長門丸に乗じ、九日夕刻横濱着。東京に至り船町高知屋に投

ず。林有造の書生となり、小石川丸山町岩村通會館に居り、林有造の塾生可美學館に通學す。この時岩村は北海道長官で任地に在つた。十二月二十五日保安條例で退去を命ぜられ、東海道を徒歩で西下した。この時未だ汽車が全通していなかつた。

明治二十一年新年を豊橋で迎う。一月十五日歸郷。本月二十四日宇和島に出て、二・三友人と九州に赴き、長崎から清國に航せんと計畫し、八幡濱大洲に至つて窮困して進むことが出來ず、再び宇和島に返る。七月より同地高木行正の家に寄寓。ついでその紹介で法圓寺の一室に假寓し佛典を讀む。十月志を得ずして家に歸る。十一月再び東上の途大阪に止まる。こゝでは中江兆民、栗原亮一が「東雲新聞」を發行してゐた。須藤定憲と共に壯士芝居を開始した舊友横田金馬の紹介で中江兆民の學塾に住込む。

明治二十二年二月、憲法發布さる。中江兆民東京で「日刊政論」を發行し大阪の「東雲新聞」とをかけもちする。十月五日兆民夫人、令嬢、令息に感して海路東京に向う。學町に寓し更に表神保町に移る。

明治二十三年六月、病む。一時千葉に轉地し九月郷里にかえる。

明治二十四年四月、土京し再び中江家に寓したが六月又病を得、その間國民英學會に通學したが

郷里より月七圓宛送金があることになつたので廣川町に下宿する。此頃文學書を耽讀する。吉原に遷り初める。

明治二十六年三度中江家に寓する。國民英學會を卒業する。九月「自由新聞」(兆民主宰)に入る。小杉三省、宮崎晴淵、溝口市次郎等が主な論者であつた。秋水の月給七圓で、英字新聞の翻譯に従事した。南波登波の家に移る。

明治二十七年三月より平河町一丁目に下宿す。日清戦争開始。

明治二十八年二月十六日廣島に入る。三月から四月迄小田眞一主宰の「廣島新聞」に従事、前田三遊、荻原綱彦と俱であつた。五月「中央新聞」に入社。

明治三十一年二月「中央新聞」を去り、「萬朝報」社に入る。

明治三十三年三月十四日母と共に歸省の途に上り老母のため耳順の復健を開くこと二日。六月麻布宮村町七十三番地に轉す。

明治三十四年愈々社會主義者としての定見も完成に近づき四月「帝國主義」を著す。五月社會民主黨を組織し禁止さる。八月二日恩師兆民の病を見るため堺に赴く。この頃大井馬城労働運動のため上京。八月三十日大宮政談演説に臨んだが、最初の労働演説である。兆民は九月に「一年有半」に遊ぶ。

を上梓し續いて「續一年有半」が成る。十二月に兆民は死す。

明治三十六年七月「社會主義神髓」を著す。十月、日露戦争反對の故を以て萬朝報社を退く。十一月、堺利彦等と共に週刊「平民新聞」を發行した。

明治三十八年三月「平民新聞」の論文が祟り入牢する。禁錮五ヶ月。十月、平民社解散の後米國に遊ぶ。

明治三十九年六月米國より歸朝し専ら世界革命運動の潮流を説く。

明治四十年一月、同志と共に月刊「平民新聞」を發行す。二月、日本社會黨大會で議會政策に反對す。

明治四十一年、赤旗事件で多数の同志入獄。

明治四十三年有名な大逆事件の首魁といふことで起訴さる。

明治四十四年一月二十四日刑により利根の露と惜えた。年四十一。

秋水の著書で世に知られているものは「社會主義神髓」の外「帝國主義」「社會主義管見」「基督抹殺論」等がある。尙堺利彦との共著「共產黨宣言」の翻譯も亦名譯として著名である。

-9777

昭和二十二年十二月卅日初版印刷
昭和二十三年一月一日初版發行

幸徳秋水著 社會主義神髓

定價三十圓



著者 幸徳秋水

發行者 長野市西長野二番地 竹内薫平

印刷 長野市大門町南二番地 清水與助

發行所

長野市西長野二番地
山川書店

會員番號A二二五〇三四番
振替口座東京一八四六八四番

配給元

日本出版配給株式會社

本製・印刷 社會會名合刷印 柏

